琉球大学学術リポジトリ

北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都（１０）：宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて

メタデータ	言語:
	出版者:
	琉球大学国際地域創造学部地域文化科学プログラム
	公開日: 2021-04-12
	キーワード (Ja): 北魏, 孝文帝集団, 遷都, 平城, 洛陽, 平城尚書省・洛陽尚書省並立体制, 柔然
	キーワード (En):
	作成者: 長部, 悦弘, Osabe, Yoshihiro
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/48065

地理歴史人類学論集　No.10 (2021) pp.29-60
Journal of Geography, History, and Anthropology

北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都（１０）

－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて－

長　部　悦　弘

The Secratary Department 尚書省 and Transfer of the Capital from Pingcheng 平城 to Luoyang 洛陽 under the Reign of the Emperor Xiaowen 孝文帝 at the Age of Beiwei 北魏

Yoshihiro OSABE

要 旨

北魏孝文帝代は、北魏史上国家体制の一大転換点とみなすことができよう。４７６年に始まる文明太后馮氏の臨朝聴政下では、４８４年に班禄制を立て、４８５年に均田法を頒布し、４８６年に三長制を敷いた。４９０年の文明太后馮氏の亡き後、孝文帝親政下で４９１年に第１次、４９９年に第２次官制改革を各々遂行し、４９３年には洛陽遷都を敢行し、４９６年は姓族詳定を推進した。なかでも４９３年の平城から洛陽への遷都は、北魏史上領域支配体制の中心たる王都を『農業－遊牧境界地帯』から『農業地域』に移した一大事業であったと言える。

小論では、４９３年９月に孝文帝が洛陽において遷都を宣言した後、４９４年１２月～４９５年８月までの間「平城尚書省・洛陽尚書省並立体制」を支えていた孝文帝集団の構成員が洛陽遷都・領域支配体制の理念を巡り、賛成・反対二派に分かれた原因について論じた。

キーワード：北魏　孝文帝集団　遷都　平城　洛陽　平城尚書省・洛陽尚書省並立体制　柔然

目次

序
第１章　孝文帝の尚書省重視
第２章　孝文帝代前期献文帝と文明太后の軋轢（４７１～４７６）
第３章　文明太后による献文帝の寵臣粛清（４７６～４７９）
第４章　文明太后臨朝聴政体制の確立－文明太后集団の成立
第５章　孝文帝集団の成立
　第１節　文明太后集団の継承と構成員に対する処遇
　第２節　孝文帝集団の独自構成員
　第３節　外戚李氏と馮氏の待遇
第６章　孝文帝代の尚書省高官
　第１節　献文帝実権期（４７１～４７６）

第２節　文明太后臨朝聴政期（４７６～４９０）
第３節　孝文帝実権期第１期（４９０～４９７）
A 洛陽遷都前　（４９０～４９３）
B 洛陽遷都後（４９３～４９７）
第４節　孝文帝実権期第２期（４９７～４９９）
第７章　孝文帝の行幸・親征行
第８章　北魏支配者層の洛陽徙住－孝文帝平城－洛陽行を含めて
第９章　孝文帝巡幸・親征行随従者
第１節　洛陽－豫州・鄴行幸及び洛陽－平城行幸随従者
第２節　南斉親征行随従者
第１０章　平城留守者並びに洛陽留守者
第１節　平城留守者
第２節　洛陽留守者
第３節　平城留守者・洛陽留守者と元氏
第１１章　平城尚書省・洛陽尚書省並立体制（４９４年１２月～４９５年８月）
第１節　平城尚書省高官就任者
第２節　洛陽尚書省高官就任者
第１２章　孝文帝集団と行幸・親征行随従者及び平城・洛陽両尚書省並立体制
第１節　孝文帝集団と行幸・親征行随従者
第２節　孝文帝集団と平城・洛陽両尚書省並立体制
第１３章　平城・洛陽両尚書省並立体制の消滅と洛陽尚書省単立体制の確立
第１節　穆泰・陸叡一派の処分
第２節　洛陽尚書省単立体制の成立（１）
第１４章　洛陽遷都と対柔然関係
第１節　洛陽遷都反対論者元丕と陸叡
第２節　対柔然関係
第１５章　洛陽遷都賛成派・反対派の軍事活動と遷都議論
第１節　洛陽遷都賛成派・反対派の軍事活動
第２節　洛陽遷都を巡る議論
第１６章　洛陽遷都と領域支配体制
結語　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（以上本号）

第１４章洛陽遷都と対柔然関係

第１節洛陽遷都反対論者元丕と陸叡

北魏支配者層、孝文帝の遂行する一連の改革を巡って支持派と反対派とに割れた。その端緒となったのは、４９２年正月に発した爵制改革令であった。これにより、宗室中道武帝直系子孫以外の構成員並びに異姓の王爵を公爵に降下したのである。(『魏書』７下 高祖紀下 太和１６年〔４９２〕正月乙丑の條、『北史』３ 魏本紀３ 太和１６年〔４９２〕正月乙丑の条、『資治通鑑』１３７ 斉紀３ 武帝永明１０年〔４９２〕正月乙丑の条)（２）かかる爵位変更への不満が、降爵された宗室元氏内部の疏属、異姓の間に渦巻いていたと思われる。さらに一連の改革中、鮮卑族の旧来の伝統・習慣の変更への反発も蟠っていたと考えられる。とりわけても洛陽遷都を巡り、賛成派と反対派とに割れた。支配層の最高峰であった孝文帝集団も、周知の如く、支持派と反対派とに割れた。反対派の筆頭格として認められるのは、元丕と陸叡である。反対派の中心人物であった陸叡と暗黙の支持を与えていた元丕は、反対する理由を積極的に明言してはいない。両人とも、「保守派」とレッテルを貼られる人物である。その性格・資質を今少し子細にみてみよう。(３)

元丕は爵制改革に伴い降爵されたことを不快に思った。その上「雅だ本風を愛し、新式に達せず」とあるが如く、鮮卑古来の習俗を好み、新しい漢族風の風俗に通ぜず、風俗の変更、官制の変革、服装制度の改変、鮮卑語の使用禁止は、望むところではなかった。(『魏書』１４元丕伝・『北史』１５同伝)。かくの如く鮮卑族の旧習を墨守し、変えることを好まなかったが、かといって漢族を無闇と排除したわけではなかった。漢族士人である隴西郡の李氏から子息の元超のために妻李氏（李輔の娘、李伯尚の妹、李沖の姪）を迎えることを許している。(『魏書』１４元丕伝・『北史』１５同伝)「博く国事を記す」とある如く、鮮卑の故事に通暁していたが(『魏書』１４元丕伝・『北史』１５同伝)、頑迷固陋という訳ではなかった。恐らく自らが漢文化を受け入れなくとも、少なくとも他の鮮卑族が漢文化を受容することを積極的に排撃することはなかったように見える。三長制は、文明太后臨朝聴政期（４７６～４９０）の４８６年に内秘書令であった李沖が文明太后馮氏の面前で提案し、賛否両論を巻き起こした。中書令鄭羲を急先鋒として、秘書令高祐・著作郎傳思益ら漢族士人が反対する中、当時太尉であった元丕は、「この法が施行されたならば、公私に益あると思います」と賛意を表し、最終的に文明太后が認めるに至った。(『魏書』５３李沖伝)人臣の最高位を占め、宗室の長老であった元丕が賛成したことは、三長制の実現を大いに後押ししたと思われる。三長制が財政収入の安定確保のために必要であったことに照らして、元丕は財政運営にも十分な理解があったと判断される。この点、李沖と認識を共有していたと推測される。実務に暗かったと決めつけるわけにはいかない。北魏が財政上山東地域に依存していた点に照らして、三長制を施行する主要な対象地域が同地域であったと考えられる。（４）洛陽は財政上北魏の生命線とも言うべき山東地域に位置し、太行山脈を隔てた平城よりも財を得るのに便利な地である。国家の王都を移したならば、好都合なことこの上ないであろう。にもかかわらず、元丕は親子ともども洛陽遷都に対しては、喜ばなかった（『魏書』１４元丕伝・『北史』１５同伝)

一方陸叡は学問を好み、博陵郡の名族崔鑒の娘を妻に迎えた。岳父の崔鑒からは、改姓前に漢族とは異なる複姓（歩六孤氏）であることが惜しいと言われながらも、その才能は評価された。(『魏書』４０陸叡伝・『北史』２８同伝）また４９４年に孝文帝が平城において、胡族が常々学問を学ぶ必要がないと言っているのを聞いて落胆を覚え、中原に必ずしもこだわるわけではないが、胡族が学問を学ぶよう導くために、もし平城に居たならば、学問を学ぶのを嫌う君主が出現した場合には、学問を学ばないままに終わるだろう。」と洛陽遷都の理由を鮮卑族に学問を学ばせる

のが目的であったと仄めかしたのに対して、賛意を表している。(『魏書』２１上元羽伝・『北史』１９同伝）それは、鮮卑族が自身と同様に漢族の文化である学問を学ぶことに対して反対していたわけではなかったことを示す。孝文帝が、漢文化を積極的に導入したことだけが、政変を企てた理由ではないと思われる。岳父馮熙が薨去した４９５年に、陸叡が元丕とともに第１回南斉親征行（４９４年１２月～４９５年５月）を進めていた孝文帝に平城に戻ってその葬礼に出るよう求めたのは、４９３年の洛陽遷都宣言以後久しく離れていた孝文帝を平城に呼びよせようという意図から出たものであろう。その行為は、孝文帝の怒りを買った。(５）上述の孝文帝との会話では洛陽遷都に対して賛意を表したものの、本音は反対であったことを示している。

元丕・陸叡は、漢文化の受容に反対するが故に、洛陽遷都に抗ったわけではないであろう。洛陽遷都を巡って分かれた賛成・反対両派に分裂した原因は、むしろ各々の考える領域支配体制の経済上・軍事上の最優先事項であったと思われる。それらは北魏の支配領域内部の構造だけでなく、ユーラシア東部において、北魏の北方に隣接する遊牧国家柔然との力関係が影響しているように考えられる。南方に移動する洛陽遷都の経緯を考察するに当たり、背後となる北方の柔然との力関係は無視できない。事実、従来の研究において、洛陽遷都と柔然との関係を結びつけて言及しているものが認められる。即ち洛陽遷都を可能にした条件を、ユーラシア東部の遊牧民との力関係を視野に入れて検討している。その見解は、２つに分けられる。１つは当時の柔然が強勢であったので、これを避けるために遷都したというものである。他の１つは、逆に勢力が弱体化したが故に、遷都が実現できたという論である。(６)

次節では、洛陽遷都前後に北魏を取り巻く対外状勢中、柔然との関係に焦点を絞って、領域支配体制の観点から孝文帝集団内部の路線対立を考察しよう。というのも、柔然に対する状勢分析の相違が北魏の領域支配体制を巡って、孝文帝集団内部に路線対立を産んで分裂を導いたと想定されるからである。

第２節対柔然関係

実は孝文帝代４９３年の洛陽遷都の開始から遡ること約８０年前の明元帝代４１５年にも、平城を離れて他の地へ遷都する案が出された。それを契機に、明元帝の臣下の間で議論が交わされた。これまでの研究において、洛陽遷都の背景を考察するに当たって、明元帝代の議論に言及したものは認められない。洛陽遷都を巡って賛成･反対両派が生じた背景を浮き彫りにするために、当該議論を一瞥しよう。

４１５年に凶作に見舞われた際、宮廷内、明元帝の面前において、飢饉に陥った一般民を救済する対応策を巡って議論が交わされた。議論の焦点は、食糧を確保するためにその供給基地であった農業地域たる山東の統治拠点であった鄴に遷都するか否かという事であった。遷都を主張したのは、華陰公主・太史令王亮・蘇垣であった。もし鄴へ遷都したならば、その後５０年間は、食糧危機を免れる趣旨の発言をした。これに異論を唱えたのが、崔浩と周澹であった。確かに当該年において飢饉は救うことはできるが、不慣れな気候・風土の山東に移住することにより、罹病して死傷者を出し、四周の国に軽侮の念を起こさせ、ひいては夏国や柔然の侵入を招き、それまで拠点としていた雲中や平城が危殆に瀕する恐れがあると反対したのである。結局明元帝は崔浩・周澹の反対論を受け入れ、鄴へ遷都することなく、代わりに一般民を山東の３州に就食させたのであった。(『魏書』３５崔浩伝・『北史』２１同伝）ここで注目したいのは、崔浩が反対論を唱える上で柱となった、山東への遷都が夏軍や柔然軍の侵入を招来すると述べている点である。

崔浩は両軍の侵入を誘引する原因として山東への移住者が多数病に倒れ、周囲から軽んぜられることを真っ先に挙げているが、その念頭にはそれまでの拠点であった太行山脈の西麓を占め、柔然の活動地域であるモンゴル高原南縁の陰山山脈南方に位置している平城から王都を移すことにより、北魏の中核地域であった山西の雲中・平城地域の軍事体制が弱体化し、太行山脈を間に挟んで隔たっている山東の鄴からでは軍を繰り出して柔然の侵入軍に対応することが困難となるという予測があった。（７）夏国は、４１２年に太行山脈以西・オルドス高原南縁に位置する統万城を本拠地に成立し、４３１年に北魏太武帝の華北統一過程において滅ぼされた。一方柔然は、４世紀中葉には存在が認められ、５世紀以後、５５５年に突厥に取って代わられるまで、北魏の版図の北方に隣接するモンゴル高原を支配していた国家である。（８）北魏が４３９年に太武帝により北涼を滅ぼして華北統一を完成させたのを機に、その後に続く華北の平城・洛陽・鄴・長安などに王都を置く北朝国家と江南の建康に王都を定めた南朝国家とが対立する所謂『南北朝時代』の幕が開いたとされる。陰山山脈・燕山山脈以南の中華領域に視野を限定する限り、５世紀・６世紀において北魏の統一前後に跨がって対立した国家としては、江南の建康に王都を置く東晋（３１７～４２４）･南朝国家の宋（４２４～４７９）･南斉（４７９～５０２）･梁（５０２～５５７）･陳（５５７～５８９）のみが目に入るだけであるが、視野をモンゴル高原を含むユーラシア東部全体に広げて見ると、隣接国家として柔然（４世紀～５５２）・高句麗（紀元前１世紀頃～６６８）・吐谷渾（３２９～６６３）が認められる。夏国・柔然・高句麗・吐谷渾・東晋・南朝諸国家が北魏と並立した期間を比べると、北魏が３８６年に道武帝により創建されてから以後４９３年の洛陽遷都開始まで、最も長く並存した国家は高句麗、次いで吐谷渾であり、そして柔然であった。先に柔然と並んで崔浩が鄴に遷都した場合侵入を危ぶんだ夏国は、存立した期間は北魏による華北統一前の僅か２０年にしか過ぎなかった。それに比べて、高句麗・吐谷渾・柔然は１００年以上に亘る上記の全期間存在し、ユーラシア東部において中華領域の北朝国家たる北魏、南朝国家の宋・南斉・梁と並立していた。なかでも柔然は、北魏が拠点地域としていた雲中・平城地域の農業一遊牧境界地帯とその勢力圏が直に接していた。それに対して、高句麗・吐谷渾は北魏の心臓部たる雲中・平城地域から遠く離れていた。江南諸国家は言うまでもなく、夏国･高句麗･吐谷渾に比べても、柔然は北魏に与える軍事上の脅威の度合いは遙かに大きかった。柔然こそ、北魏にとり最大・最強の宿敵であった。崔浩の発言が示す如く、その動向が北魏の軍事行動を左右し、また遷都を企画するに際して最も顧慮しなければならない勢力であったのである。そこで、次に北魏と柔然との関係を瞥見しよう。

北魏と柔然との関係は、潘國鍵氏によると、道武帝代３８６年から孝文帝代４７４年までの約９０年間が軍事衝突時期であったのに対して、孝文帝代４７５年から孝明帝代５２３年までの約５０年間は、長期平和存続時期であった。（９）

潘國鍵氏が北魏と柔然の軍事衝突時期であったとする時期において、孝文帝が「南征」と公言して平城を空けた４９３年より遡ること４０年前にも、柔然が侵攻する事態に有効に対処するために太行山脈東麓の鄴への遷都を断念した明元帝の後を襲った太武帝が４３９年に華北統一を成し遂げた後、４５０年に江南を目指して南征を敢行し、平城を留守にした。親征軍は、４４９年１２月または４５０年正月に平城を出発し、同年１２月には長江北岸の瓜歩山に至り、宋朝の王都建康を対岸に臨んだ。その後翌年正月には反転して、３月に平城に凱旋した。（『魏書』４下　世祖紀下 太平真君１１年正月乙酉の條、同上 太平真君１１年１２月癸未の條、同上 正平元年正月丁亥の條、同上 正平元年３月己亥の條、『北史』２ 魏本紀２ 太平真君１１年正月乙丑の條、

同上 太平真君１１年１２月癸未の條、同上 正平元年正月丁亥の條、同上 正平元年３月己亥の條）太武帝は、１年有余に亘り、その本拠地平城を留守にしたのである。

太武帝はその治世中、南征前には華北統一を挟んで４２４年・４２７年・４２９年・４３８年・４３９年・４４３年・４４８年・４４９年の７度に亘って柔然を攻撃した。(『魏書』１０３ 蠕蠕伝）（北魏太武帝代〔４２４～４５２〕対柔然関係表）とりわけても４４９年の南征直前には２回に亘り攻撃を加え、痛撃を与えた。４４９年正月には北魏太武帝の親征軍が、柔然を討伐し、柔然側から一千家余りが投降した。柔然主処羅可汗（郁久閭吐賀真）は遁走した。(『魏書』４下 世祖紀下 太平真君１０年正月甲戌の條及び２月の條・『北史』２ 魏本紀２ 太平真君１０年正月甲戌の條、『魏書』１０３ 蠕蠕伝・『北史』９８ 蠕蠕伝、『資治通鑑』１２５ 宋紀７ 文帝元嘉２６年正月甲戌の條）同年９月には北魏親征軍は、柔然を再討伐した。北魏は、柔然の民戸・畜産１００万余りを獲得した。(『魏書』４下 世祖紀下 太平真君１０年９月の條、『北史』２ 魏本紀２ 太平真君１０年９月の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２５ 宋紀７ 文帝元嘉２６年９月の條）かくの如く、北魏側は柔然に甚大な損害を与えた。その結果、柔然は北に退き、敢えて南下しようとはしなくなった。(『魏書』１０３蠕蠕伝･『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２５ 宋紀７ 文帝元嘉２６年９月の條）柔然は北魏を侵すだけの余力を失ったものとみられる。かくの如く１年以上に亘り、太武帝が平城を離れることを決意した背景には、難敵であった柔然をその前に徹底的に叩き、留守中襲来する可能性を断ったからであろう。とは言え、それでもなお柔然に対する警戒を解くことはなかった。太武帝が平城を出発した直後、皇太子拓跋晃を漠南に配置し、拓跋余に平城を留守させて、柔然の侵入に怠りなく備えた。(魏書』４下 世祖紀下　太平真君１１年９月癸巳の條、『北史』２ 魏本紀２ 太平真君１１年９月癸巳の條、『資治通鑑』１２５ 宋紀７ 文帝元嘉２７年９月辛卯の條）

太武帝代の末期４４９年に痛撃を加えた後、軍事衝突時期に分類されるその後の文成帝代・献文帝代にも、北魏側が柔然に積極的に攻撃を加え、逆に柔然が北魏に侵攻し、また北魏側が反攻を加えた。北魏の柔然攻撃は４５４年・４５８年・４７０年の３度に亘り、柔然の北魏への侵入は４６４年・４７０年の２回であった。(北魏文成帝・献文帝・孝文帝代〔４５４～４９２〕対柔然関係表）

北魏と柔然の間において軍事衝突時期・長期平和存続時期と言っても相対的な状況にしか過ぎず、長期平和存続時期と目される孝文帝代においても、軍事上の衝突が皆無であったわけではない。その初期である４７２年１１月北魏献文太上皇帝が親征軍を率いて、柔然討伐に出動した。だがその後２０年間は、北魏側が柔然に対して遠征して積極的に軍事行動を仕掛けることはなかった。どちらかといえば柔然が北魏に侵入する頻度が高かった。柔然が北魏に侵入したのは、４７２年の３度、４７４年・４８５年の各１度、４８６年の２度、４８７年の１度であった。北魏はその都度侵入軍を撃退するに留まっていた。侵攻と織り交ぜて、前代と打って変わって、朝貢を盛んに行うようになった。４７４年･４７５年の各１度、４７６年の４度、４７７年の２度、４７８・４７９年・４８０年の各１度、４８１年の２度、４８２年・４８４年・４８６年の各１度であった。即ち４７４年から４８６年にかけては、４８３年を除いて、毎年朝貢した。とくに４７６年・４７７年・４８１年には、複数回行った。前代には、見られぬ事であった。４８８年から４９１年までの期間は、柔然の朝貢もなかったが、北魏・柔然双方の軍事行動が停止していた。長期平和存続時期と言われる所以であろう。その間、４８８年１２月に柔然の伊吾戍主高羔子が、４８９年柔然の別帥叱呂勤が各々内附した。４９２年８月には、北魏が２０年ぶりに柔然

に対して軍事的攻勢に出た。元頤（陽平王）・陸叡・斛律桓が率領する北魏軍７万騎が柔然を叩き、北魏の方が軍事上優位に立ったとみられる。４９３年８月に洛陽遷都に孝文帝が動き出す時点において、柔然は背後から城を侵せるほどの力を持ち得ないくらい弱体化していたと考えられる。（北魏文成帝・献文帝・孝文帝代〔４５４～４９２〕対柔然関係表）

潘國鍵氏は柔然が衰退した結果、４９３年正月の詔に表現される、諸民族が北魏に帰服していた状況（『魏書』７下 高祖紀下 太和１７年〔４９３〕正月乙丑の条「今諸辺君蕃胤、皆虔集象魏、趨鏘紫庭。」）を、孝文帝が洛陽遷都を進める上で、有利な客観的条件となったと指摘している。（１０）かかる状勢を巡って、北魏の支配者層の最高集団が意見が分かれたと推察される。私は潘國鍵氏の高見には傾聴すべきであると考えるが、遷都を巡って北魏の支配者集団が割れた点には言及がない。そこで次に両派の相違・対立を生じた原因を軍事面から探るために、洛陽遷都に対する賛否両論者の軍事活動への関与を確認してみよう。

第１５章洛陽遷都賛成派・反対派の軍事活動と遷都議論

第１節洛陽遷都賛成派・反対派の軍事活動

洛陽遷都賛成派と反対派には、孝文帝代の遷都前において軍事活動に従事したものが確認される。各々以下のような軍事活動歴が認められる。

賛成派では、元澄（任城王）・穆亮が各々柔然及び南斉と交戦した。元澄（任城王）は、孝文帝代４８５年に柔然を討伐（『魏書』７上 高祖紀上 太和９年〔４８５〕１２月の条・『北史』３ 魏本紀３ 太和９年〔４８５〕１２月の条、『魏書』１９中 元澄伝）穆亮は孝文帝代に吐谷渾を討伐し、４８８年には陳顕達の率いる醴陽に侵入した南斉軍と交戦した（『魏書』２７穆亮伝・『北史』２０同伝）

反対派では、元丕が太武帝代４３１年に柔然討伐に従事した。（『魏書』１０３蠕蠕伝・『北史』９８同伝）陸叡は、孝文帝代４８４年以後に北征都督として柔然を討った後、４８７年に北魏領内を侵した柔然を邀撃し、４９２年８月には元頤（陽平王）・斛律桓とともに柔然を叩いた。（『魏書』４０陸叡伝・『北史』２８同伝）穆羆は太武帝代４３９年に北涼平定に従軍（『魏書』４上　世祖紀上 太延５年〔４３９〕９月丙戌の条・『北史』３ 魏本紀３ 太延５年〔４３９〕９月丙戌の条）、孝文帝代に山胡劉什婆を討滅した。（『魏書』２７穆羆伝）于烈は、４８１年に文明太后馮氏と孝文帝が中山郡へ行幸して不在にしていた平城で起きた沙門法秀の乱を鎮圧した。（『魏書』３１于烈伝）

反対派の中には、于果・穆泰の如く実戦を経ていないものが、認められる。その一方で賛成派・反対派のいずれにも軍事行動の経験を有する者が居たが、その中には以上みた如く外敵である柔然に対する戦闘に従った、元澄（任城王）・元丕・陸叡といった主要人物が確認される。元澄（任城王）・元丕は各々１回ずつ対柔然軍事行動に参加したが、陸叡は３度に亘ったことは注意すべきであろう。元澄（任城王）が柔然討伐に従ったのは洛陽遷都を開始する８年前の４８５年であるのに対して、陸叡が最後に柔然を攻撃したのは洛陽遷都１年前であった。かかる対柔然軍事行動への参加回数、従軍時期の相違が、両者の柔然に対する危機意識の差となったと考えられる。即ち陸叡は元澄（任城王）に比べて対柔然軍事行動に多く加わり、しかも孝文帝が遷都を宣言した４９３年に最も近い年に従っていたことが、陸叡が元澄（任城王）より柔然の力量を高く評価し、脅威に対する認識をより深刻に持っていたと考えられる。

次に節を替えて、洛陽遷都を巡る議論を今一度再検討しよう。

第２節洛陽遷都を巡る議論

北魏孝文帝が洛陽遷都を目論んでいた当時、ちょうど北魏の宿敵とも言うべき、北方遊牧地域の柔然は侵入を暫く止めており、その脅威は大きく低下していた。（１１）その故であろう、孝文帝が４９３年に洛陽遷都を宣言した後、平城に戻って、遷都の是非を臣下と議論した際に、４１５年に凶作に見舞われた際、明元帝の面前において遷都を巡って繰り広げられた議論において崔浩が四周の敵対勢力中唯一柔然の名を挙げて専らその脅威を理由に反対したほど、洛陽遷都への反対者の中に柔然に対する警戒心を露わに表白したものはいない。その背景には、柔然の勢いが低調であったからであると考えられる。但だ反対派の急先鋒であった穆羆は、洛陽へ王都を移したならば､四方の敵対勢力を征討するために必要な軍馬が手に入らなくなると論陣を張った。四方の敵対勢力として、南の南朝国家、西の吐谷渾、東の高句麗と並列して、北の柔然を挙げていることは見逃せない点である。(『魏書』１３元丕伝）崔浩ほど柔然を主敵として強調していなくとも、なおも侵攻してくる可能性を秘めており警戒を解いてはならない相手として認識していたかのようである。

元澄（任城王）は孝文帝の片腕としてその意を体現すべく、平城・洛陽をはじめ各地を奔走した洛陽遷都推進派の筆頭格であった。かれは、先に見た如く、柔然に対する軍事行動に従事した経験があった。だが穆羆とは対照的に、柔然に対して危機感を強く抱いていなかったと考えられる。孝文帝をはじめ洛陽遷都推進派は、元澄（任城王）の如く、北方の宿敵である柔然の勢力が、北魏を脅かす可能性が限りなく低くなっていたと判断したと推定される。それ故遊牧地域に近い農業－遊牧境界地帯の平城に糧食供給の不安定な状況を耐え忍びながら王都を置き続けておく必要性が少なくなったと認識したとみられる。農業－遊牧境界地帯の平城に領域体制の中心を据えた結果、招来した当該地の自然条件に起因する糧食供給体制の脆弱な点を致命的欠陥として深刻に受け止め、その解決を図るべく従来糧食確保上最も依存してきた農業地域である山東地域に属する洛陽に本拠地を移して、山東農業地域からの糧食供給体制を立てて強化しようとしたと考えられる（１２)。国家の領域支配体制の再構築を、狙ったものと思われる。さらに軍事上南斉への進攻を、柔然に対する防備・進撃より重視し、それ故に南斉からの距離が平城より近い位置にある洛陽を選んだと思われる。（１３）

一方、元丕・陸叡・穆泰・穆羆らの反対派は、農業－遊牧境界地帯の平城に本拠地を構えることにより、自然条件に起因する糧食供給体制の脆弱な欠陥を抱えつつ農業地域である山東地域に経済上依存する構造に変更は加えないという立場を堅持しようとした。換言すると、立地に起因する糧食供給上欠陥克服という課題の解決は２の次にして、先ず第１に、主として侵寇が止んでいるとはいえ依然として脅威を与える可能性を内包した北方の柔然に対する陰山山脈の北鎮を前線基地として平城が司令拠点となる軍事体制を維持することを最重要視した。それを支えるために軍馬を養っていた河西（オルドス）地域を近辺に抱えて軍馬が容易に確保できる位置を保持したいと願ったと考えられる。それなるが故に対柔然軍事行動を取る上で平城よりも長い距離の移動を強いられ、さらに軍馬を養っていた牧畜地から離れることとなる洛陽への遷都に反対したと思われる。それは平城を中心に北辺陰山山脈周辺に配置された六鎮を核に組み立てられた軍事体制の改変、あるいは弱体化を意味していると、かれらの眼に映ったと推測される。

賛成派は文化上洛陽は漢族にとっては世界の中心であると意識されており、その地に王都を定めることにより、かれらに向けて中華王朝として正統性を主張できるとにらんだ。まず第１に北

魏領域内の漢族に対して、正統王朝としての認識を加速する効果を期待した。糧食供給上最も依存せざるを得ない山東農業地域は漢族士族の淵藪であった。とくに経済上最も頼む山東農業地域の漢族士族を掌握し、同地域の支配を強化することを狙ったと思われる。さらに江南の建康に首都を置く漢族王朝の南斉に対しても、軍事行動により圧力を直接与えるだけでなく、文化上正統性を示すことにより、政治的優位を獲得できると計算したとみられる。（１４）一方、反対派は賛成派ほど南斉進攻を重視せず、求めなかった。

４９３年９月洛陽遷都決定後、４９４年１２月に洛陽尚書省が設立されてから４９５年８月に平城尚書省が廃止されるまで、北魏は洛陽・平城両地に国家の中枢機関たる尚書省を機能させていた点に鑑みて、その間実質上農業－遊牧境界地帯と農業地域に各々都を置く『両都制』が敷かれていたとみなせる。尚書省は、糧食の供給、人事の選定などを掌管する行政の中枢機関として機能していたが、平城から洛陽へ遷都する過程においては、とくに平城・洛陽両地に振り分けられた住民、そのなかでも北魏支配者層に供給する糧食の確保が喫緊の責務としてのしかかって来たと考えられる。彼等への糧食の安定供給がその不満を抑え、洛陽遷都の成否の第１の鍵を握っていたと思われる。さらに加えて、孝文帝の心中には南征計画も潜んでいたと推察される。大規模な軍事行動である南征を推進する上で、兵員の徴発、兵糧・武器・衣料などの兵站を準備する必要に迫られていたとみられる。かかる作業も、尚書省が進めていかなければならなかったと考えられる。（１５）それなるが故に、小論の劈頭で掲げた如く、孝文帝は尚書省に自らの浮沈がかかっていると表明したのであろう。（１６）

孝文帝は、洛陽遷都を円滑に運ぶために、洛陽遷都決定前から後までの平城尚書省単立時代には平城尚書省に、洛陽遷都後の平城尚書省・洛陽尚書省並立時代には平城尚書省と洛陽尚書省の両方に、平城尚書省廃止後の洛陽尚書省単立時代には、信頼できる孝文帝集団構成員を配置した。とくに宗室元氏を頂点に据えるように努めた。

４９５年元丕・陸叡らが平城尚書省から外されるまでは、北魏支配層内部の遷都賛成派・反対派は各々領域支配体制の最重要点に関して異なる見解を胸中に抱え、緊張関係を秘めながらも、実質上両都体制を支えていたと考えられる。おそらく平城尚書省高官の元丕・陸叡らの目には、洛陽尚書省は臨時に地方に設置する行台（＝行尚書省台）と見えていたのかも知れない。あるいは自身に対して、かかるものとして言い聞かせていたかのように推察される。（１７）それが４９５年に両人が平城尚書省を去り、同年尚書省が廃止され、平城が首都として有する行政中枢機能を失い、両都体制が消滅するに及んで、緊張関係が高まり、政変計画を立てるに至ったと考えられる。４９６年に反対派の頭目たる陸叡が平城を去るに際して､対立が表面化したのである。

平城尚書省廃止後の洛陽尚書省単立時代において、元丕・陸叡ら遷都反対派を政界から一掃した後、孝文帝第２回南斉親征行（４９７年８月～４９９年正月）による第８回洛陽留守期間（４９７年８月～４９９年正月）には、胡族は宗室の元澄（任城王）・元詳（北海王）・元賛、漢族は孝文廃皇后馮氏・孝文幽皇后馮氏・李沖・李彪・崔振・崔亮・崔休を留守に置くが、この内洛陽遷都推進時に最も信頼し、補佐役の中心を担った元澄（任城王）と李沖を各々尚書右僕射と尚書左僕射に任命して、遷都賛成派で尚書省を固めたのであった。

次に、洛陽遷都を領域支配体制の観点から再考しよう。

第１６章洛陽遷都と領域支配体制

洛陽遷都に関しては、実は王都を農業－遊牧接壌地帯の平城にそのまま置き続けることを主張

する意見の他に、３種類の対案が提起された。先ずは農業－遊牧接壌地帯の平城と農業地域の洛陽を結ぶ二都体制を提起する者が居た。また農業地域内部の鄴への定都、長安への奠都を発案する者が認められた。これらの意見と孝文帝の反応を瞥見しよう。

平城・洛陽両都案を提案したのは、漢族士人の韓顕宗であった。韓顕宗は、孝文帝が洛陽遷都を宣言した後、４９４年に２度に亘って上奏した。上奏の内容は、第１回目は４項目、第２回目は６項目から各々成った。２度の上奏では、各々１項目を平城・洛陽両都案に割いた。第１回目の上書では、洛陽を「洛都」と称する一方で、平城を「北京」と呼んで、孝文帝に地方諸州を親征軍を養う負担から解放するために、速やかに平城に帰るよう促した。第２回目には、平城を「代京」と呼び、西周及び後漢に習って、その周辺地区を「甸畿」として設定し、平城に「代尹」を置いて、洛陽と並ぶ都に定め、両都制を敷くよう提案した。(『魏書』６０韓顕宗伝・『北史』４０同伝、『資治通鑑』１３９ 斉紀５ 明帝建武元年〔４９４〕正月乙亥の条)

長安への遷都は、李冏により提起された。(『魏書』３６李冏伝・『北史』３３同伝) 主張の根拠については、史書には記されていない。考えられるのは、前漢と同様に軍事上有利な関中盆地に位置する長安に定都することを唱えたのであろう。

鄴遷都を主張したのは、高閭であった。高閭は洛陽遷都に１０の問題を挙げて反対し、代わって鄴遷都を提案した。(『魏書』５４高閭伝・『北史』３４同伝) 孝文帝は韓顕宗の両都案、李冏の長安遷都案には歯牙にもかけた様子はないが、高閭の鄴遷都案に対しては強い嫌悪の情を抱いたと記される。(『魏書』５４高閭伝・『北史』３４同伝) 高閭が洛陽遷都に反対する理由として挙げた１０の問題点は史乗に明記されていない。ただ最も多くの支持者を集め易い有力な対案だったと思われる。

鄴城は太行山脈以東に広がる黄淮海平原内の河北平原の西端、幽州州城の薊県県城（＝燕郡郡城）から定州州城の盧奴県県城（＝中山郡郡城）を経て洛陽に至る太行山脈東麓路線上に位置している。古来太行山脈以東の山東地域を統治する上で生産面・交通面において好条件を備えていた。（１８）生産面では漳水から農業用水を得る灌漑設備が充実し、交通面においては河北水路網の起点である。（１９）鄴県県城（相州州城・魏郡郡城）には道武帝代３９６年に平城に尚書省が設置されてから１年半後、中山郡郡城（定州州城）とともに招撫安民を目的に行台（行尚書省台）が設置された。さらに道武帝は、鄴への遷都をも考えた。(『魏書』２ 太祖紀天興元年〔３９８〕正月の条、『北史』１ 魏本紀１天興元年〔３９８〕正月の条) また上述した如く、明元帝代４１５年に凶作に襲われた時にも、食糧確保のための策として湧き起こった遷都議論の候補地として俎上に上がったのが鄴であった（『魏書』３５崔浩伝・『北史』２１同伝』)。鄴は孝文帝自身が洛陽遷都事業の途次、滞在した都市でもある。（２０）

太行山脈西麓には農業－遊牧境界地帯に隣接する農業地域には、都市晋陽（太原）が存在していた。背後のオルドス地方の遊牧地域からは軍馬を容易に確保でき（２１)、晋陽（太原）の位置する太原盆地、その南に列なる西側の臨汾盆地・運城盆地（涑水盆地)、東側の長治盆地（上党盆地）から糧食の農業生産物を獲得でき、山東の黄淮海平原より高所である山西高原に存していたが故に、山東地域からは攻めにくく、守りやすい、強力な軍事拠点となる条件に恵まれていた。当該地が敵対勢力・反抗勢力に一旦占拠されたならば、山東地域に拠点を置く勢力にとり、死命を制せられる可能性の極めて高い要地であった。それは、後年六鎮の乱に乗じて台頭した爾朱氏軍閥集団が晋陽（太原）に本拠地を置き、洛陽の北魏朝廷を支配する「王都－覇府体制」を樹立したことからも明らかである。（２２）オルドス地方の遊牧地域と山東の農業地域を結ぶ中

継地点として、極めて重要であった。鄴は晋陽（太原）とは太行山脈を間において滏口道を介して２００km しか離れておらず（２３）、一方洛陽は４６０km 隔たっていた。鄴は洛陽より近い距離にあり、晋陽（太原）と連絡して同地を抑える上で好都合であったとみられる。後年東魏・北斉が西魏･北周の攻勢を避けて鄴に遷都したとは言われるが、副都に指定した軍都晋陽（太原）との連繫に便がよかったからであろう。かかる晋陽（太原）との位置関係も、高閭が鄴遷都を主張する論拠に加わっていた可能性がある。

孝文帝が洛陽遷都で意図したことは、農業地域である太行山脈以東の黄淮海平原の広がる山東地方全域に対する統治を強化することであったと思われる。もしそうであれば、すでに道武帝が行台（行尚書省台）を設置し、定都を考えたことのある鄴への遷都を唱える高閭の主張は一定の説得力を持つ。（２４）だが孝文帝にすれば、黄淮海平原内部において、拠点を太行山脈東麓線沿いにさらに南下させることにより､同平原北部を占める河北平原から供給される糧食を背景に、鄴より南方、同平原南部である黄河以南の黄淮平原のさらなる統治強化を進める拠点を築き、江南への侵攻を狙ったと推察される。（２５）

孝文帝は国家理念の面からも、北魏が天下の中を占める洛陽に王都を定めることを願望していた。（２６）北魏は道武帝代３９８年に黄帝を継承する立場から、土徳を標榜した。(『魏書』１０８之１ 礼志１）孝文帝は洛陽遷都宣言に先立つこと２年前、４９１年に西晋を受け継ぐ国家として水徳に変更した 。(『魏書』１０８之１ 礼志１）変更前、北魏が国家として五徳中継承すべき徳が土徳・水徳のいずれであるかを巡って高閭と李彪との間で論争が繰り広げられた。高閭は後趙は西晋の後水徳、前燕は後趙の後木徳、前秦は前燕の後火徳を各々受けているとみなせることから、北魏は土徳を継ぐ国家だと主張している。一方李彪の側は北魏と対抗関係にあった前秦・後趙、敵対関係にあった後燕より、友好関係にあった西晋を継いだ国家として水徳を受けていると応酬した。結局李彪の論が司空穆亮・尚書左僕射陸叡・吏部尚書王元孫・中書侍郎崔挺・中書侍郎賈元壽の支持を受け、孝文帝に採用された。(『魏書』１０８之１ 礼志１）曹魏・西晋を受け継ぐ中華の正統国家として宣言したに等しい。（２７）とするならば、洛陽に都を置くのが最も適応しい。

仮に高閭の主張の内容が上記の如くであったならば、鄴が山東統治拠点として他の者に対しても魅力あるものに映じる可能性を秘めていた。しかしながら孝文帝は目指す統治体制・国家理念上、受け入れ難かったものと思われる。それ故、高閭の論が自ら意図していた洛陽への遷都を妨げる懼れを強く抱き、嫌悪したものと思われる。

結語

孝文帝は洛陽の遷都事業の成否が尚書省にかかっていると、４９３年９月の洛陽遷都宣言より１年後、４９４年９月に平城において公言したことは前述した。事実かかる大事業を推進できる機関は、門下省でもなく中書省でもなかった。（２８）また内朝官でもなかった（２９）徴税・土木をはじめ実務を総轄する尚書省こそ、遷都事業を牽引する機関であり、その成否を左右していた。（３０）平城と洛陽の両地に尚書省は設けられ、いずれにも孝文帝集団構成員が高官として配属された。

４９６年正月に姓族を詳定し､胡漢八姓･漢族四姓を頂点に門閥体制を立てたとされる。（３１）それは、孝文帝集団を頂点とした胡漢合作体制とみなせよう。ただその中には八姓の一員に数えられる元丕・穆泰・陸叡など洛陽遷都反対派も含まれていた。だが４９６年に政変が企てられた

翌４９７年２月に孝文帝が自らの手で平城においてかれらを排斥し、孝文帝集団は遷都推進派一色となった。その結果孝文帝集団は反対派を黙認して含んでいた集団から完全に脱皮し、政策実行集団へと変容したのである。その主要構成員は、胡族では元氏宗室の直属である、孝文帝の兄弟である元禧（咸陽王）・元幹（趙郡王）・元詳（北海王）・元雍（高陽王）、叔祖（太武帝の孫）の元澄（任城王）、疏族の元賛、元氏以外の穆亮・于烈、漢族では隴西郡の李沖であった。これらの人々が遷都事業では、要所要所において働いた。そしてまた国家体制の行政・軍事両方面において主導的立場に立った。ただ胡漢合作体制とは言っても、尚書省において元澄（任城王）が上位に立ち、漢族士人が隴西郡の李沖を筆頭として実務面において下支えしていたことから、遷都事業を巡って、胡族の宗室元氏の直属たる孝文帝の兄弟、元澄（任城王）が最優位を占め、その下に八姓の于烈・穆亮が列なり、さらに漢族士人が隴西郡の李沖を筆頭として従事する運営体制が確立されていたとみられる。実質は胡族中宗室元氏の孝文帝の兄弟を中心とする直属が最上位に位置し、次いで元氏の疏族、八姓に位置づけられた于氏・穆氏などの胡族が主導的立場に置かれ、第３位に隴西郡李氏を筆頭とする漢族士族が従う階層構造が立てられていたと推察される。（３２）

最後に北魏孝文帝代以降の王都所在地にみる領域支配体制について、唐代までの見通しを一言しておこう。北魏の洛陽単都体制は結局は待遇問題が原因で遊牧地域で惹起した六鎮の乱を契機に、根本的な変容を遂げた。西方の遊牧地域に隣接する農業地域である太行山脈西麓の晋陽（太原）に広大な農業地域たる黄淮海平原の西端、太行山脈南麓の王都洛陽を凌駕する軍事拠点が生まれ、「王都－覇府体制」が樹立された。（３３）その後、東魏・北斉が晋陽（太原）・鄴の太行山脈東西両麓の２大拠点に股を架けた「王都－覇府体制」が生まれ、対抗する西魏・北周においては関中盆地内部の長安と華州を拠点に「王都－覇府体制」が立てられた。（３４）北周による北斉併呑・華北統一、隋の江南陳朝の征服・中華領域の統一を経て、唐朝が隋末唐初の内乱から立ち現れて、対抗する諸集団を撃破して中華領域の再統一を成し遂げて、遊牧地域に隣接する農業地域の長安・晋陽（太原）、東方の広大な農業地域たる黄淮海平原に属する洛陽の３大都市から成る三都体制が象徴する安定した領域支配体制が確立されるまで、なお１００年以上もの間長安・晋陽（太原）・洛陽・鄴・建康に拠点を置く諸政治軍事勢力の対立、争覇戦に明け暮れた長い道のりを経験しなければならなかった。（３５）

注

（１）　①第１章・第２章・第３章の３章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて－」（１）（『琉球大学法文学部人間科学科紀要』２７　２０１２年）に掲載。

②第４章・第５章の２章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて－」（２）（『琉球大学法文学部　人間科学科紀要』２９　２０１３年）に掲載。

③第６章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて－」（３）（『琉球大学法文学部　人間科学科紀要』３１　２０１４年）に掲載。

④第７章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状

況に焦点を当ててー」（４）（『琉球大学法文学部　人間科学科紀要』３２　２０１５年）に掲載。

⑤第８章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当ててー」（５）（『琉球大学法文学部　人間科学科紀要』３３　２０１６年）に掲載。

⑥第９章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当ててー」（６）（『琉球大学法文学部　人間科学科紀要』３６　２０１７年）に掲載。

⑦第１０章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当ててー」（７）（『琉球大学法文学部　人間科学科紀要』３７　２０１７年）に掲載。

⑧第１１章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当ててー」（８）（『琉球大学国際地域創造学部　地域文化科学プログラム　地理歴史人類学論集』８　２０１９年）に掲載。

⑨第１３章・第１４章は、拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当ててー」（９）（『琉球大学国際地域創造学部　地域文化科学プログラム　地理歴史人類学論集』９　２０２０年）に掲載。

（２）　爵制改革により降爵を受けて、不満を抱いたものがいたことに関しては、以下の研究を参照。

長堀武「北魏孝文朝における君権安定策とその背景」『秋大史学』３２　１９８５年）

不満を抱いた人物として、孝文帝集団の元丕が挙げられている。元丕は、東陽王から平陽公へ降され、さらに新興公へと変更されている。（『魏書』１４元丕伝・『北史』１５同伝）

『魏書』１４元丕伝「（元）丕父子大意不楽遷洛。」

『北史』１５元丕伝「（元）丕父子大意不楽遷洛。」

『魏書』１４元丕伝「（元）丕雅愛本風、不達新式、至於変俗遷洛、改官制服禁絶旧言、皆所不願。高祖（＝孝文帝）知其如此、亦不逼之。但誘示大理、令其不生同異。至於衣冕已行、朱服列位、而（元）丕猶常服列在坐隅。晩乃稍加弁帯、而不能修飾容儀。高祖（＝孝文帝）以（元）丕年衰体重、亦不強責。及罷降非太祖（＝道武帝）子孫及異姓王者、雖較於公爵、而利享封邑、亦不快。」

『北史』１５元丕伝「（元）丕雅愛本風、不達新式、至於変俗遷洛、改官制服禁絶旧言、皆所不願。（孝文）帝亦不逼之。但誘示大理、令其不生同異。至於衣冕已行、朱服列位、而（元）丕猶常服、列在坐隅。晩乃稍加弁帯、而不能修飾容儀。（孝文）帝以（元）丕年衰体重、亦不強責。及罷降非道武（帝）子孫及異姓王者、雖駮於公爵、而利享封邑、亦不快。」

（３）　北魏の支配者層が、孝文帝の改革に対して、支持者・反対者に分かれたことについては、以下の研究を参照。

王仲犖『魏晋南北朝史』（下）（上海人民出版社　１９７９年　５４０～５４３頁）

王仲犖氏は、北魏の支配者層が、孝文帝の改革を巡って、保守派・中間派・改革派の３派閥に割れたと述べている。保守派とは改革反対派であり、改革派は改革支持派であり、中間派は両派閥の間にあって積極的に意志を表明しない模様眺めをしていた人々の集合である。

（４）　近年渡辺信一郎氏の手により北魏の財政構造が研究された。以下渡辺氏の研究により、糧

食供給体制を考えてみよう。同氏によると、北魏前期と後期の戸調制度は各々以下のようになる。
渡辺信一郎「北朝の財政構造－孝文帝・宣武帝期の財政構造を中心に－」(『北朝財政史の研究－『魏書』食貨志を中心に－』〔平成１１年度～平成１４年度科学研究費補助金研究成果報告書〕　２００２年、のち『中国古代の財政と国家』　汲古書院　２０１０年所収)参照。
前期は西晋の戸調制を受け継ぎ、①県と②州の２段階に区別された。①県は各戸の資産評価を基準に決められた９等級の差等にしたがって実施される収取②州が管轄下郡県の収取物から支配戸数に１戸当たり標準額（帛２匹・絮２斤・絲１斤・粟２０石）を乗じて算出した額を中央に納める公調からなる。
後期は、孝文帝代前期４８６年の三長制により、一夫婦単位の課税額を規準に均一に賦課されるようになった。その結果、県段階での収取と公調との区別が解消され、すべての収取物は国家による中央管理下に置かれた。
後期（孝文帝代･宣武帝代･孝明帝代〔４７１年～５２８年〕）の収入と支出の分析結果は、以下のようになる。
収入は、次の８項目である。
①常調（五調　粟・絹・布・綿・麻）
②雑調
③兵調
④屯田収入
⑤僧祇粟
⑥鹽税
⑦市税
⑧公田賃租
支出（経費）は、次の４項目である。
①中央経費（公調）（ⅰ）軍事経費（ⅱ）祭祀・儀礼費（ⅲ）内廷費（御府・内庫）（ⅳ）賞賜費（ⅴ）食糧費（１百官廩食費２百官常給酒３百官食鹽４蕃客廩食費）（ⅵ）保険的経費（中央貯備）
②内外官僚俸禄
③地方経費（調外）
④保険的経費（地方貯備）
北魏財政は収入を穀物と反物を基礎として、経費として支出され、国家の活動を支えた。穀物は、州倉に搬入された。献文帝代（４６５～４７１）には畿内外の別及び資財の等級に応じて租税を輸入するよう定めた。畿内は粟（籾つき穀物）、畿内の外の州は米（脱穀済み穀物）を各々納入する。九等戸中、上等三品戸は王都平城の倉に、中等三品戸は自身の居住州以外の州の重要な倉に、下等三品戸は自身の居住州の倉に各々納付させた。(『魏書』１１０食貨志)
渡辺氏は、孝文帝代前期４８４年までに地方財政経費として調外費の項目が立てられ、中央経費と地方経費が区分されたと指摘する。さらに４８８年には地方保険的経費が設定され、中央公調・地方州調外・内外百官俸禄・地方保険的経費の４種の経費分配的構造をと

るようになったとする。北魏の地方財政の特徴として、戸調収取は県を単位に行われたが、州が中心の財務運営、即ち州倉中心の財務運営を行った点にあったと述べる。北魏地方財政の第１の特色として、穀物・反物を主とする財物が州に輸送され、蓄積された点にあると換言している。北魏後期においては、州倉に納められた穀物が保険的経費（地方貯備）、州庫に納入された反物が地方経費（調外）として地方財政を構成したという事になろう。州による地方財政の運営が行われる一方、中央の管理が行われるように転換したことに、注意を喚起している。ただ北魏後期においてはもとより、中央の管理体制が確立前の前期においても凶作時には州倉に備蓄されていた穀物が供出され、賑恤に用いられた。

上記のような財政体制の下で、北魏は洛陽遷都を間に挟む前期・後期を通じて、太行山脈以東に広がる黄淮海平原、即ち山東農業地域に財政上依存していたとみられる。そのことは、凶作飢饉時の糧食供給から看取される。

北魏が山東農業地域に依存していたことに関しては、史念海「戦国至唐初太行山東経済地区的発展」(『北京師範大学学報〔社会科学版〕』１９６２－３　１９６２年､のち『河山集』生活・読書・新知　三聯書店　１９６３年）参照。

但し史念海氏の指摘は、以下の元暉の上奏に基づいている。

「又河北数州、国之基本。飢荒多年、戸口流散。（略）国之資儲、唯藉河北。」(『魏書』１５元暉伝)･「又河北数州、国之基本。飢荒多年、戸口流散。（略）国之資儲、唯藉河北。」(『北史』１５元暉伝)

元暉の上奏は、北魏後期に属する孝文帝代の洛陽遷都後である孝明帝代において糧食を山東農業地域、即ち黄淮海平原の黄河以北の河北平原に拠っていたことを示す。

北魏前期、洛陽遷都より８０年前の明元帝代４１５年に平城が凶作に見舞われた時に、就食先として選ばれたのは、山東地域の定州・相州・冀州であった。３州とも河北平原に位置した。(『魏書』３５崔浩伝・『北史』２１同伝、『資治通鑑』１１７ 晋紀３９ 安帝義熙１１年〔４１５〕の条）当時の就食地は､『魏書』３５崔浩伝･『北史』２１同伝､『資治通鑑』１１７ 晋紀３９ 安帝義熙１１年（４１５）の条ではいずれも「山東三州」とのみ記されているが､『資治通鑑』の胡三省注には「山東三州、定（州）・相（州）・冀（州）也」とある。この時点で､幽州･営州を除く山東地方の他地域は､まだ北魏の版図に入っていなかった。明元帝代４２３年に洛陽を占領、４２８年に青州・兗州を宋から奪った。それ故山東地方中既に領域に入っていた定州･相州･冀州が就食地であると注記したのであろう。(後の注〔７〕所引史料参照)

明元帝代４１８年に州調の民租を戸毎に５０石を定州・相州・冀州に備蓄するよう詔勅を諸州に下した。(『魏書』３太宗本紀泰常３年９月甲寅の条）この時点でもなお、山東地域中黄河以南の黄淮地方はまだ北魏の版図に入っていなかった。

献文帝代４６６年に南朝宋の徐州刺史薛安都が投降してきた時に、尉元は徐州の州城である彭城県県城の倉庫には物資が底をついており、冀州・相州・済州・兗州の粟を運び、饑えに瀕している新帰附民を救うよう上表した。(『魏書』５０尉元伝）濟州は黄河両岸に跨がるが、大部分は南岸の黄淮平原に属した。兗州も黄淮平原に位置した。徐州との位置関係をみると、兗州は徐州に隣接し、済州は兗州の北にある地域であるので、穀物供給源となるのは当然のことと了解される。徐州に隣接する地には、洛陽を治所とする洛州が認められる。明元帝代４２３年に于栗磾が東晋の河南太守王涓之を洛陽から駆逐した後豫

州刺史として洛陽を治めた。(『魏書』３１于栗磾伝・『北史』２３同伝）その後太武帝代４２６年に于栗磾は洛州刺史として宋兵将軍周幾とともに西方の夏国に向かって侵攻する途上に位置する弘農郡の陝城を攻めた。(『魏書』４上世祖本紀始光３年９月の条）于栗磾が洛州刺史と記されているところから、洛陽を治所とする州は設置当初豫州と命名され、ついで４２３年から４２６年までの間に洛州に改名したとみられる。４６６年当時洛州から徐州へは食糧が供出されていない。洛州は食糧供給源池として役割を果たしていなかった。

山東の全域が飢饉に陥った時には、定州の貯備倉から供出されたこともあった。太武帝代４４８年２月に定州に行幸した際、山東地域の民が飢えているので倉を開いて賑恤した。(『魏書』４下世祖本紀太平真君９年２月癸卯の条；『北史』２魏本紀２太平真君９年２月癸卯の条)

孝文帝代４８３年３月冀州・定州が飢饉に見舞われたので、両州の郡県に粥を作り路上で施し、関津の禁令を緩めて飢民が自由に移動できるようにするよう、詔を下した。(『魏書』７上高祖本紀上太和７年３月甲戌の条；『北史』３魏本紀３太和７年３月甲戌の条）同年６月には定州が粥を作り飢民９４万７０００口余りを救ったと上言してきた。(『魏書』７上高祖本紀上太和７年６月の条；『北史』３魏本紀３太和７年６月の条)。同年９月には冀州が粥を供して飢民７５万１７００口余りを救済したと報告してきた（『魏書』７上高祖本紀上太和７年９月の条；『北史』３魏本紀３太和７年９月の条)。

黄淮平原上の徐州が北魏に帰属した献文帝代４６６年には、隣接する洛州がすでに支配下にあったのにもかかわらず、それを飛び越えて冀州・相州から糧食を運搬しようというのは、当時冀州・相州の穀物備蓄量が相当豊富であったからであると考えられる。太武帝代に定州州倉の備蓄食糧が山東全域の飢民が救済対象となった点からみて、相当量に上るとみてよいであろう。孝文帝代４８３年に冀州・定州が救った飢民が概数で各々７５万、９５万であり、各々最低これだけの人間に給付できるだけの食糧を蓄えていた。

北魏の人口数は、孝明帝代５２４年の六鎮の乱により各地の住民は減少し、孝荘帝代５３０年に洛陽に侵攻してきた爾朱氏軍閥集団により国家機構の文簿が散逸し、往事の編戸が復元できない状態に陥った。そのため東魏孝静帝代武定年間（５４３～５５０）の人口数を『魏書』に記載した。(『魏書』１０６上 地形志上）そのような条件下で、北魏代、内田吟風氏は北魏代正光年間（５２０～５２５）以前の全盛期の人口数を推算した。内田吟風氏の算定によると、概数が戸数５００万余り、人口３２００万余りである。(内田吟風「北魏の人口及び戸数について」『神戸大学文学会研究』３０　１９６３年、のち『北アジア史研究　鮮卑柔然篇』 同朋舎　１９７５年所収）内田氏の推算が正しいとすると、各々全人口の４０分の１前後を養いうる備蓄量があったと言える。先に確認した如く、献文帝代に定めた租税輸入規定によると、上等三品戸は平城に納入するのに対して、中等三品戸は自身の居住州以外の州の重要な倉に輸入、下等三品戸は自身の居住州の倉に搬入した。この規定に照らして、当該規定が立てられた後、冀州・定州、そして相州はあるいは中等三品戸が搬入対象となる重要倉を抱えていたものと推察される。

河北平原上にある定州・相州は平城から太行山脈を隔てた山東地域の交通路線中最も近い太行山脈東麓線上にあり、冀州は同路線上の相州に接していたが故に、山東の他地域を支配下に納めた後も平城が凶作に襲われた際には、山東の他地域よりもまず最初に頼るべき

地方として浮かび上がったものと考えられる。また山東内部で飢饉が起こった際にも以上の３州が供給源となったであろう。

洛陽遷都後も、先に確認したように糧食を山東の洛陽に近い河北地方に拠っていた。北魏孝明帝代５２５年に前年に起きた六鎮の乱の後投降してきた六鎮出身の飢民２０万人余りを山西の并州ではなく、山東内部でも河北平原の冀州・定州・瀛州に分散させて就食させた。(『魏書』５８楊昱伝）このことは、それを裏付けるであろう。

洛陽遷都後河北地方に拠っていたのは、洛陽遷都前、平城に都があった時代から変わらず継続していたものと理解される。北魏前期・後期を通じて、平城・洛陽は黄淮海平原が広がる山東地域中の黄河以北である河北平原の太行山脈東麓線上の定州・相州・冀州の租税収入に立脚した糧食供給体制に依存していたと言えよう。糧食の源は、州倉に収納した常調中の粟であったであろう。

（５） 注（１）③拙稿の注（１）

（６） 孝文帝の洛陽遷都に関する研究は、対柔然関係を視野に入れて論じている研究とそうでない研究に分類できる。対柔然関係に触れている研究は、以下の通りである。

①注（３）王仲犖氏書　　５３９～５４０頁

②潘國鍵『北魏与蠕蠕関係研究』（台湾商務院書館　１９８８年　７９～８０頁）

③王霊善「中編　北魏中期的社会改革与進歩　第７章孝文帝遷洛与維新　第１節遷都洛陽」(杜士鋒編『北魏史』 山西高校聯合出版社　１９９２年　２４１～２４２頁）

④張金龍「北魏中後期的北辺防務及其与柔然的和戦関係」(『西北民族研究』１９９２－４　１９９２年、のち『北魏政治与制度論稿』 甘粛教育出版社　２００３年）

①及び③は、洛陽遷都の目的の１つとして、柔然の脅威を避けることを挙げている。

②は、柔然が衰退したことは、洛陽遷都を進める上で、有利な客観的条件となったと指摘している。

④は、４９２年に翌年の洛陽遷都を円滑に推進する目的で、柔然を叩いたと論じている。

（７） 『魏書』３５崔浩伝「神瑞二年（４１５）、秋穀不登、太史令王亮・蘇垣因華陰公主等言讖書国家当治鄴、応大楽五十年、勧太宗（＝明元帝）遷都。(崔）浩与特進周澹言於太宗（＝明元帝）曰：『今国家遷都於鄴、可救今年之飢、非長久之策也。東州之人、常謂国家居広漠之地、民畜無算、号称牛毛之衆。今留守旧都、分家南徙、恐不満諸州之地。参居郡県、処榛林之間、不便水土、疾疫死傷、情見事露、則百姓意沮。四方聞之、有軽侮之意、(赫連)屈丐・蠕蠕必提挈而来。雲中・平城則有危殆之慮、阻隔恒・代千里之険。雖欲救援、赴之甚難。如此則声実倶損矣。今居北方、仮令山東有変、軽騎南出、燿威桑梓之中、誰知多少？百姓見之、望塵震服。此是国家威制諸夏之長策也。至春草生、乳酪将出、兼有菜果、足接来秋。若得中熟、事則済矣。』太宗（＝明元帝）深然之、曰：『唯此二人、与朕意同。』復使中貴人問（崔）浩・(周）澹曰：『今既糊口無以至来秋、来秋或復不熟、将如之何？』(崔）浩等対曰：『可簡窮下之戸、諸州就穀、若来秋無年、願更図也。但不可遷都。』太宗（＝明元帝）従之。於是分民詣山東三州食、出倉穀以稟之。来年遂大熟。賜（崔）浩・(周）澹妾各一人、御衣一襲、絹五十匹、綿五十斤。」

『北史』２１崔浩伝「神瑞二年（４１５）、秋穀不登、太史令王亮・蘇垣因華陰公主等言：『讖書云：“国家当都鄴、応大楽五十年”』、勧（明元）帝遷都於鄴、可救今年之飢。(明元）帝問（崔）浩。(崔）浩曰：『非長久策也。東州之人、常謂国家居広漠之地、人畜無算、号称

牛毛之衆。今留守旧都、分家南徙、恐不満諸州之地。参居郡県、処榛林之間、不便水土、疾疫死傷、情見事露、則百姓意沮。四方聞之、有軽侮之意、（赫連）屈丐・蠕蠕必提挈而来。雲中・平城則有危殆之事、阻隔恒・代千里之険。須欲救援、赴之甚難。如此、則声実倶損矣。今居北方、仮令山東有変、軽騎南出、燿威桑梓之中、誰知多少？百姓見之、望塵震伏。此是国家威制諸夏之長策也。至春草生、乳酪将出、兼有菜菓、足接来秋。若得中熟、事則済矣。』（明元）帝深然之。復使中貴人問（崔）浩曰:『今既無以至来秋、或復不熟、将如之何？』（崔）浩対曰：『可簡窮下之戸、諸州就穀、若秋無年、願更図也。但不可遷都。』（明元）帝於是分人詣山東三州就食、出倉穀以稟之。来年遂大熟。賜（崔）浩妾各一人、及御衣綿絹等。」

『資治通鑑』１１７ 晋紀３９ 安帝義熙１１年（４１５）の條

「　魏比歳霜旱、雲・代之民多飢死。【胡注】〔雲・代、雲中・代郡二郡之地。〕太史令王亮・蘇垣言於魏主（拓跋）嗣（〔＝明元〕帝）曰:『按讖書、魏当都鄴、可得豊楽。』（拓跋）嗣（〔＝明元〕帝）以問群臣。博士祭酒（崔）浩・特進京兆周澹曰：『遷都於鄴、可以救今年之饑、非久長之計也。山東之人、以国家居広漠之地、【胡注】〔『広漠』、拠『北史』崔浩伝作『広漠』。当従之。漠、大也。〕謂其民畜無涯、号曰“牛毛之衆”。今留兵守旧都、【胡注】〔謂平城也。〕分家南徙、不能満諸州之地、参居郡県、情見事露。恐四方皆有軽侮之心。且百姓不便水土、疾疫死傷者必多。又旧都守兵既少、（赫連）屈丐・柔然有窺窬之心、挙国而来。雲中・平城必危、朝廷隔恒・代千里之険。【胡注】〔自恒山至代、有飛狐之口・倒馬之関、夏屋・広昌・五廻之険。〕難以赴救。此則声実倶損也。今居北方、仮令山東有変、我軽騎南出、布濩林薄之間、【胡注】〔郭璞曰:“布濩、猶布露也。” 毛晃曰:“布濩、流散也。草叢生曰薄。”〕孰能知其多少。百姓望塵慴伏。此国家所以威制諸夏也。来春草生、湩酪将出、【胡注】〔湩、覩勇翻、又多貢翻、乳汁也。酪、歴各翻、乳漿也。西漢太僕属官有挏馬。応劭曰：“主乳馬取其汁、挏治之。味酢可飲、因以名官。如淳曰：“主乳馬以韋革為夾兜、受数斗、盛馬乳挏取其上肥、因名挏馬。今梁州名馬酪為馬酒。（顔）師古曰：“挏、音徒孔翻。”〕（拓跋）嗣（〔＝明元〕帝）曰:『今倉廩空竭、既無以待来秋。若来秋又饑、将如之何？』（崔）浩対曰:『宜簡飢貧之戸、使就食山東。若来秋復饑、当更図之。但方今不可遷都耳。』（拓跋）嗣（〔＝明元〕帝）悦曰：『唯二人与朕意同。』乃簡国人尤貧者詣山東三州就食、【胡注】〔拓跋氏起於漠北、統国三十六、姓九十九。道武（帝）既幷中原、徙其豪桀於雲、代、与北人雑居、以其北来部落為国人。山東三州、定（州）・相（州）・冀（州）也。〕遣左部尚書代人周幾帥衆鎮魯口以安集之。【胡注】〔魏初、四方四維置八部大人、分東・西・南・北・左・右・前・後。後又置八部尚書。『魏書』「官氏志」：拓跋鄰以次兄為普氏、後改為周氏。蓋魏建代都、周幾遂為代人。帥、読曰率。〕（拓跋）嗣（〔＝明元〕帝）躬耕藉田、且命有司勧課農桑。明年（義熙１２年・泰常元年〔４１６〕）、大熟。民遂富安。」

（８）　柔然の歴史については、以下の研究を参照。

①内田吟風「柔然時代蒙古史年表」（「後魏柔然表」『東洋史研究』８－５・６　１９４４年、同９－３　１９４４年、のち『北アジア史研究　鮮卑柔然篇』同朋舎　１９７５年所収）

②内田吟風「柔然族に関する研究」（「柔然史序説」『羽田博士頌壽記念記念東洋史論叢』　１９５０年、のち『北アジア史研究　鮮卑柔然篇』　同朋舎　１９７５年所収）

③内田吟風「柔然の滅亡年について」（「丁令柔然族史二考」『石浜博士古稀記念東洋学論叢』　１９５８年、のち『北アジア史研究　鮮卑柔然篇』　同朋舎　１９７５年所収）

④注（５）②潘國鍵氏書

③によれば、５５５年に柔然主鄧叔子の率いる千家が突厥により滅亡されたからといって、柔然の余類は依然としてモンゴル高原各地に残っており、柔然が突厥により完全に撃滅・併合されたのは、５８０年とみられる。ただし北魏に対抗できるだけの力を備えていたのは、５５５年以前とみておきたい。

（９） 注（６）②潘國鍵氏書７７～８０頁参照。

(10) 注（６）②潘國鍵氏書８０頁参照。

(11) 注（６）②潘國鍵氏書８０頁参照。

(12) 注（４）参照。

(13) 佐川英治「北魏洛陽の形成と空間配置－外郭と中軸線を中心に－」(『大阪市立大学東洋史論叢』別冊特集号　２００５年、のち『中国古代都城の設計と思想－円丘祭祀の歴史的展開－』 勉誠出版　２０１６年所収）参照。

(14) ①労幹「北魏後期的重要都邑与北魏政治的関係」(『歴史語言研究所集刊外編　第４種　慶祝董作賓先生論文集』〔上〕　１９６０年）

②注（13）佐川英治氏研究

③佐原康夫「周礼と洛陽」(『古代都市とその形制』〔奈良女子大学 21 世紀 COE プログラム報告集１４〕 奈良女子大学　２００７年）

④窪添慶文『北魏史』(東方書店　２０２０年　１９０頁）

(15) 洛陽遷都を進めるに当たって財政運営上統制がとれ、その基盤たる財物の収取供給体制がそれに耐えられるだけの充分な量を備えていなければでなければならなかったであろう。平城での糧食供給体制が十分でなかったとしても、もし新たな体制を構築するための事業遂行に耐えられないほど脆弱な状態であったならば、国家体制そのものが瓦解に瀕する状況に陥ったと考えられる。少なくとも中央の尚書省からの指令に従って糧食を供給する移動途次の各州倉の充実していなければ、実現不可能であったと思われる。

具体的に言うと、平城に残る者への給与・糧食の配給、平城から洛陽へ移動する者への路上での糧食配給、移動先である洛陽での給与・糧食の配給である。この他、遷都に伴う仕事として、移動の案内・護衛、路線上での宿泊先の手配、滞在家屋の建設・配当、さらにはかかる実務を差配・推進できる有能な人材の確保といった問題に当面向き合わなければならなかったであろうことは想像に難くない。本文中で述べた通り、平行して新都城洛陽の建設も進めていかなければならなかった。南征のための兵員・兵站の獲得も、行っていかなければならなかったと推察される。

洛陽遷都事業遂行期間中移動者のために、渡辺信一郎氏の分析結果に従うならば、支出項目中、中央経費では食糧費の百官廩食費・百官食鹽、保険的経費（地方貯備）が使われたと推測される。移動する内官を含む内外官僚俸禄も平行して捻出されなければならなかったであろう。さらに孝文帝が進めていた南征軍事行動のために中央経費の軍事経費が消費されたであろう。眼前に山積する処理すべき実務案件は従来の水準をはるかに超える相当量に達していたであろう。

尚書省は遷都に関わる実務中計画遂行の財源となる徴税、土木を総轄していた。４９４年の時点で、尚書省には前年に頒布された「職員令」により、吏部・殿中・儀曹・七兵・都官・度支・庫部の７部が設けられていた。７部中、吏部には吏部曹・主客曹、殿中部には殿中曹、儀曹部には儀曹・祠部曹・主客曹・起部曹、七兵部には七兵曹・左外兵曹・右外兵曹、

都官部には都官曹・二千石曹、度支部には度支曹、庫部には庫部曹、計１４曹が設置され、各々郎中が主導した。のちに孝文帝代の４９４年より後、北魏代後期には、吏部には考功曹・南主客曹・北主客曹、殿中部には三公曹・駕部曹、儀曹部には左主客曹・右主客曹・虞曹・屯田曹、七兵部には左中兵曹・右中兵曹・都民曹、都官部には左士曹・右士曹・比部曹・水部曹、度支部には左民曹・右民曹・金部曹の１９曹が新設された。尚、庫部は宣武帝代に廃止され、首曹の庫部曹は度支部に属した。かくの如く４９４年より後、１９曹が増置されたのは、尚書省が処理すべき案件が格段に増えたがために、従来の１４曹だけでは手に負えなくなったからであろう。７部中山積する課題を最も率先して取り組まなければならなかったのは、徴税などの財政業務を預っていた度支部であろう。

４９４年より後、度支部に倉部曹・左民曹・右民曹・金部曹・庫部曹が漸次設けられた。増設後、首曹たる度支曹が軍民両政の支出・収入、労役・食糧の計算を掌管した。倉部曹は倉の出納業務を担当、左民曹は計帳・戸籍を管轄、右民曹は公私の田宅・租調を司った。金部曹は度量衡・内外庫の帳簿を握った。庫部曹は武器を管理した。(『隋書』２７　百官志中）４９４年の時点において、度支部には後年増設した倉部曹・左民曹・右民曹・金部曹はなく、庫部曹は上述した如く庫部に属しており、唯一度支曹だけがあった。従って度支曹は庫部曹の掌管事項は別として、後年増設した４曹が負った実務を統轄していたと考えられる。

また上記４曹がもし洛陽への移動を開始する前夜の４９４年の時点で設けられていたならば、その果たすべき責務は次のようになろう。倉部曹は平城在住者・洛陽への移動者への食糧の供給・給与の支給、左民曹・右民曹は供給食糧・給与の準備、金部曹は移動する兵士を含む軍隊への武器の提供を行ったと考えられる。この他、右民曹は移住者への洛陽への途上の宿泊・洛陽の定住住居の手配に当たった可能性がある。金部曹の業務は、宣武帝代の庫部廃止前実際は庫部の庫部曹が行ったであろう。洛陽城の建設は、儀曹部内の建築事業を掌る起部曹が担当したとみられる。(『隋書』２７　百官志中）人材獲得は、吏部の吏部曹が唯一の担当機関として働いていた。孝文帝代には、宣武帝代に至って、官員の勤務評定を施行する考功曹が設けられた。考功曹を欠いていた孝文帝代には、吏部曹が官僚の銓選のみならず、勤務評価の考功も兼務していたであろう。

度支曹は、金部曹の業務を除く、叙上の洛陽遷都に伴う平城住民の移動を下支えする仕事を一手に引き受けざるを得なかったと思われる。とくに糧食供給の面で、度支曹には計り知れない圧力がかかったであろう。糧食を給付する上で、度支曹の郎中への厳しい要求ぶりは、洛陽遷都より２０年余り後に生じた六鎮の乱鎮圧に関中地方に派遣された部隊の兵糧を巡る逸話から容易に想像できる。５２５年に前年に勃発した六鎮の乱に呼応して関中で蜂起した莫折大提一族を鎮圧するために関西大都督に任ぜられた蕭宝寅が給付された軍糧が１月分しかないと報告した際、孝明帝は大いに怒り関係者に問い質した。尚書省の上司であった録尚書事・尚書令は度支郎中であった朱元旭に責任を転嫁した。朱元旭は入朝して孝文帝の前で指を折って蕭宝寅の兵糧を数えて１年以上の供給量があることを立証し、事なきを得た。(『魏書』７２朱元旭伝・『北史』４５同伝）これに先立って孝明帝代５１９年に尚書郎中の多くが無能であったので、その大多数を罷免した。残ったのは８人だけであった。朱元旭は、辛雄・羊深・源子恭・祖瑩とともに免官を免れた数少ない１人であった。(『魏書』７２朱元旭伝・『北史』４５同伝；『資治通鑑』１４９梁紀５武帝天監

１８年〔５１９〕の条）転じて洛陽遷都という数十万もの人間を移動させるという、非常事態である征戦を上回る尋常ならざる大事業を敢行するに当たって、最低限糧食の手配が円滑に進めなければなかったことは、言を待たない。かかる難事を負い得る人材が求められたであろう。

趙郡李遵は遷都前に度支郎中であり、遷都後は営構将として洛陽に転じた。（『魏書』４９李遵伝）洛陽遷都にかかる費用は、孝文帝代だけで終わらなかった。宣武帝代にも継続して、負担を負わなければならなかった。洛陽都城は宣武帝代にも外郭城を建設した。崔亮は宣武帝代５００年から５０４年までの間に度支尚書に任命されるが、孝文帝代遷都後四方への軍事行動を進め、洛陽都城建設を続行し、莫大な費用が掛かったのを受けて、別に条格を立てて歳出を節減した。（『魏書』６６崔亮伝・『北史』４４同伝）李遵は遷都前に度支郎中として名目上「南征」という遷都のために準備に当たった可能性がある。営構将は、洛陽城建設に関わった役職とみられる。とすれば、営構将に転じたのは、遷都前に度支郎中として揮った手腕が買われたと臆測される。

崔亮は孝文帝がわざわざ平城から洛陽へ駅馬により吏部郎中に徴召された経歴を持つ。その後中書侍郎・尚書左丞を経、宣武帝代において度支尚書に就く前に給事黄門侍郎に就くが、その間吏部郎中を兼任していた。その手腕は、吏部尚書の郭祚からかれを欠いて選事はできないと言わしめるほど高い評価を受けた。（『魏書』６６崔亮伝・『北史』４４同伝）その才は上で見たように、財政においても発揮された。李遵・崔亮は、いずれも漢族士人であった。度支曹には、かくのごとき有能な人材が漢族士人から集められ、洛陽遷都事業を裏から支えていたものと思われる。

尚、北魏の尚書省の部局構成と職掌については、以下の研究を参照。

①厳耕望「北魏尚書制度考」（『歴史語言研究所集刊』１８　１９４８年、のち『厳耕望史学論文選集』　聯経出版事業公司　１９９１年所収）

②兪鹿年『北魏職官制度考』（社会科学文献出版社　２００８年　２５１～２６３頁）

徴税の収入・支出に関しては、注（４）渡辺信一郎氏の研究を参照。

洛陽都城の建設過程に関しては、注（１３）佐川英治氏研究を参照。

(16)　拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都－宗室元氏の尚書省官への任官状況に焦点を当てて－」（１）（『琉球大学法文学部人間科学科紀要』２７　２０１２年）参照。

(17)　行台（＝行尚書台）については、以下の研究を参照。

①古賀昭岑「北魏の行台について　その一」（『九州大学東洋史論集』３　１９７４年）

②古賀昭岑「北魏の行台について　その二」（『九州大学東洋史論集』５　１９７７年）

①研究の「北魏行台設置状況と設置理由」表の４９４年の項に、設置理由として親征の項目に記し、備考欄に「洛陽に遷都」と書き込んでいる。古賀昭岑氏は、本文・注のいずれにおいても明言していないが、洛陽の尚書省を行台（＝行尚書台）と認識していたものと推察される。この推察をさらに敷衍すると、以下のようになろう。

４９４年より遡ること１００年ほど前、道武帝代３９６年に鄴県県城（相州州城・魏郡郡城）と中山郡郡城（定州州城）に招撫安民のために行台（行尚書省台）が設置された（『魏書』２太祖本紀天興元年正月庚子の条；『北史』１魏本紀１天興元年正月庚子の条）平城尚書省に居た陸叡をはじめ、平城に留まっていた反対派にはかかる歴史事実が記憶にあり、その目には道武帝代の相州行台・定州行台と同じく恒久的な機関ではなく、一時的に設置

されたに過ぎないと映っていた可能性がある。

(18)　①村田治郎「鄴都考略」(『建築学研究』８９　１９３８年、のち『中国の帝都』綜芸舎　１９８１年所収)

②労幹「北魏後期的重要都邑与北魏政治的関係」(『歴史語言研究所集刊外編第４種　慶祝董作賓先生論文集』〔上〕　１９６０年)

③同上「論北朝的都邑」(『大陸雑誌』２２－３　１９６１年)

④郭黎安「魏晋南北朝鄴都興廃的地理原因述論」(『史林』１９８９－４　１９８９年)

(19)　①佐久間吉也「北魏時代の漕運について」(『福島大学教育学部論集』２３－１　１９７１年、のち『魏晋南北朝水利史研究』 開明書院　１９８０年所収)

②注（18）③郭黎安氏研究

③塩沢裕仁「鄴城が有する都市空間」(『中国史研究』４０〔中国都市史特輯号〕２００６年、のち『後漢魏晋南北朝都城境域研究』 雄山閣　２０１３年所収)

④佐川英治「鄴城に見る都城制の転換」(『アジア遊学２１３　魏晋南北朝史のいま』 勉誠出版　２０１７年)

③④によれば、漳水は山西省を流れる清漳水と濁漳水が合流した河川であり、太行山脈から河北平原へ流れ出す地点から扇状地を形成している。

(20)　拙稿「北魏孝文帝代の尚書省と洛陽遷都」(４)「 北魏孝文帝行幸関係表」 (『琉球大学法文学部　人間科学科紀要』３２　２０１５年)

(21)　北魏の軍馬に関しては、以下の研究を参照。
峰雪幸人「五胡十六国～北魏前期における胡族の華北支配と軍馬の供給」(『東洋学報』１００－２　２０１８年)

(22)　①拙稿「北魏爾朱氏軍閥集団考」(中国魏晋南北朝史学会・武漢大学中国三至九世紀研究所編『魏晋南北朝史研究：回顧与探索－中国魏晋南北朝史学会第９届年会論文集』 湖北教育出版社　２００９年)

②拙稿「北魏孝荘帝代爾朱氏軍閥集団再論－王都－覇府体制を焦点にして－」(１)(『琉球大学法文学部紀要　日本東洋文化論集』１５　２００９年)

③拙稿「北魏孝荘帝代爾朱氏軍閥集団再論－王都－覇府体制を焦点にして－」(２)(『琉球大学法文学部人間科学科紀要　人間科学』２３　２００９年)

④拙稿「北魏孝荘帝代爾朱氏軍閥集団再論－王都－覇府体制を焦点にして－」(３)(『琉球大学法文学部紀要人間科学科紀要別冊　地理歴史学論集』１　２０１０年)

⑤拙稿「北魏孝荘帝代爾朱氏軍閥集団再論－王都－覇府体制を焦点にして－」(４)(『琉球大学法文学部紀要　日本東洋文化論集』１６　２０１０年)

⑥拙稿「北魏孝荘帝時期的洛陽政界與爾朱氏軍閥集團(『張廣達先生八十華誕祝壽論文集』〔上〕 新文豐出版公司　２０１０年)

(23)　鄴･晋陽（太原）両都市が滏口道により結ばれていることに関しては、以下の研究を参照。
厳耕望『唐代交通図考』５　河東河北区　中央歴史語言研究所　１９８６年　１４２１～１４２５頁
鄴・晋陽（太原）両都市間の距離は、以下の研究を参照。
②注（21）①労幹氏研究。

(24)　鄴は、北魏成立前において、３世紀後漢末以来、袁紹・曹操両集団が拠点を構え、４世紀

五胡十六国時代には後趙・冉魏・前燕が都を置いた。高閭は、このような歴史を論拠に鄴への遷都を主張していた可能性がある。

鄴の歴史については、以下の研究を参照。

①注（18）③郭黎安氏研究

（25） 佐川英治『中国古代都城の設計と思想－円丘祭祀の歴史的展開－』（勉誠出版　２０１６年　２６６頁）参照。

孝文帝は平城を含む恒・代地方には漕運路がないのが原因で、平城の民は十分な糧食の供給が受けられず貧しいので、洛陽へ都を移し、四方に至る交通の便を図ると発言した（『魏書』７９成淹伝・『北史』４６同伝）。

孝文帝は黄淮海平原北部の鄴を起点とする河北地方の漕運網に加えて、従来漕運が盛んであった黄淮海平原南部の黄淮平原からも水運を通して糧食が恒常的に王都に供給できる体制を確立することが、洛陽遷都の目的の１つであったとみられる。洛陽遷都に着手する半世紀前、４４２年に太武帝は刁雍の上奏に従って当時かれが鎮将として勤めていた黄河中流域河畔の賀蘭山東方薄骨律鎮　（現在の寧夏回族自治区）から同じく河畔の陰山山脈南方の沃野鎮　（現在の内モンゴル自治区）まで兵糧の穀物を舟運したとみられる。上奏では、舟運と陸運を比較して、舟運の優位性を説いている。舟運する糧食は１回２０万斛、３月から９月まで３往復、計６０万斛に上ると計算していた。陸運では、１回につき車５０００乗を用いて、１０万斛を運び、１往復に１００日余りかかり、１年に２往復のみで、３年費やしてやっと５０万斛を運べると発言している。舟運を選んだならば、運搬にかかる人夫は陸運の１０分の１以下、耕牛を運送に振り向けることがないので、農耕を妨げることがないと述べている。太武帝はこれを受け、１度きりに終わらせず、以後定例化するよう命じた。刁雍は東晋朝から４０４年に劉裕の凶手を逃れて後秦に亡命し、４１７年の後秦滅亡後北魏に帰服してきた（『魏書』３８刁雍伝・『北史』２６同伝）。水運路の発達した江南に生まれ育ったが故に、陸路よりも水運の方が大量且つ迅速に物資輸送が行える便を熟知しており、黄河沿岸の薄骨律鎮に赴任した際、沃野鎮に向けて船で輸送した方がより高い効果を挙げる可能性があることを容易に思いついたのであろう。刁雍の提案は実行に移されたと思われるが､以後どの時期までどの程度舟運が続行したかは不明である。ただ北魏の人々は、その効用を十分見せつけられたであろう。

黄淮海平原中、徐州は献文帝代４６６年に帰附した。北魏の揚州設置の経緯は次のようになる。宣武帝代５００年に南斉の豫州刺史裴叔業は壽春から北魏に投降した。北魏はそれを受けて司徒元勰（彭城王）を揚州刺史を領して壽春に派遣した。(『魏書』８世宗紀景明元年正月丁未の条;『北史』４魏本紀４景明元年正月丁未の条;『魏書』２１下元勰伝;『北史』１９同伝 ;『資治通鑑』１４３斉紀９東昏侯永元２年〔５００〕の条)(『資治通鑑』１４３斉紀９東昏侯 永元２年〔５００〕の条では「壽春」ではなく、「壽陽」と記す)

元勰は揚州刺史として壽春県県城に鎮することとなり、豫州を揚州に改名して治所を置いた。(『魏書』１０６中 地形志中 揚州 ;『隋書』３１地理志下淮南郡）同年９月には壽春に兵９万人を駐屯させた。この後、淮南は北魏の支配下に置かれた。

孝文帝が洛陽遷都を開始した４９３年９月の時点において、徐州は北魏の版図に入っていたが､南斉の豫州､のちに北魏が揚州を設置することとなる淮南には支配が及んでいなかった。

北魏は徐州・揚州が内附してから後、中原を経由して各地の物資を辺境である南朝宋・南斉・梁との国境線に陸路で運んだが、運送に当たった農民は疲弊した。そこで国境防備兵に屯田を始めさせ、国境から離れた郡からは軍需物資を確保し、農民と和糴して入手した穀物を辺境用の備蓄物品とした。担当官は水運用の船着き場で便のよい所に倉を建てるよう請願した。その結果、黄河下流域の石門・白馬津・漳涯・黒水・済州・陳郡・大梁の８箇所に邸閣を設け、軍事上の必要が出る度に、応じて水上輸送した。(『魏書』１１０食貨志)
このように辺境である江淮地方への水上輸送体制が敷かれた時期は、献文帝代に帰属した徐州と宣武帝代に内附した揚州を「自徐（州)･揚（州）内附之後」(『魏書』１１０食貨志)とある如く、ひとまとまりにされている史料の記述からみて確定しがたい。ただ献文帝代に徐州が帰属した当初は陸上輸送に依存していたのが弊害を生じ､それが孝文帝代を経て、さらに揚州が帰属した宣武帝代も同様の状況が暫く続いた。宣武帝代５００年から５０４年までの間に度支尚書に任ぜられた崔亮は、汴渠・蔡渠を開通して国境への輸送路を構築した。(『魏書』６６崔亮伝･『北史』４４同伝)
恐らく孝文帝の脳裏には、刁雍の提案に従って黄河において試みられた漕運が功を奏した事実が焼き付けられていたと推察される。さらに想像を逞しくするならば、上述した江淮地方への水上輸送体制は、孝文帝の構想に係り、洛陽遷都以後作り上げられていったものと考えられる。

(26)　北魏の洛陽遷都が「土中」に王都を定めようとしたことについては、以下の研究を参照。
①注（18）①労幹氏研究
②注（13）佐川英治氏書２６６頁
③注（14）佐原康夫氏研究
④注（14）④窪添氏書１９０頁

(27)　注（18）①労幹氏研究

(28)　①門下省の機能については、以下の研究を参照。
窪添慶文「北魏門下省初稿」(『お茶の水史学』３２　１９９０年、のち『魏晋南北朝史官僚制研究』 汲古書院　２００３年)
窪添慶文氏によれば、北魏の門下省は、前期と後期を通じて同じ職掌を有していたが、その一方で異なる機能を持っていたとされる。門下省は前期・後期ともに皇帝の近侍官として下問に応え、使者に立ったり、草制を行った。相異点は、孝文帝代４９１年の官制改革以前には侍中が尚書を加官されることにより尚書省に関与したが、改革の結果「尚書の奏事を省する」という西晋代の機能が復活して制度上門下省官の尚書省への関与を弱めたとされる。
②中書省の部局構成・機能については、以下の研究を参照。
（a）鄭欽仁『北魏中書省考』(国立台湾大学　１９６５年､のち『北魏官僚機構研究 続篇』稲禾出版社　１９９５年　６頁・４８頁・８５頁所収)
（b）兪鹿年『北魏職官制度考』(社会科学文献出版社　２００８年　８２頁)

(29)　川本芳昭「北魏の内朝」(『九州大学東洋史論集』６　１９７７年、のち『魏晋南北朝時代の民族問題』 汲古書院　１９９８年所収)
川本芳昭氏によれば、孝文帝が４９１年１１月の官品制定に始まり、４９２年４月の新律令班布を経て、４９３年６月の職員令施行までの間に内朝制度を改革し、内朝官を廃した。

孝文帝は４９３年８月に洛陽へ「南征」という名目で移った。かれが尚書省重視の発言をした時には、内朝官はその多くが既に消滅していた。

(30)　注（15）参照。

(31)　谷川道雄「北朝の貴族制」(『歴史教育』１４－５　１９６６年、のち『隋唐帝国形成史論』筑摩書房　１９７１年､のち『増補隋唐帝国形成史論』 筑摩書房　１９９８年所収）参照。胡族八姓は穆氏・陸氏・賀氏・劉氏・楼氏・于氏・嵇氏・尉氏、漢族四姓は清河郡崔氏・范陽郡盧氏・隴西郡李氏・滎陽郡鄭氏である。(異説もある)

(32)　北魏宗室元氏内部の直属と疏族との間の差等については、以下の研究を参照。
①窪添慶文「北魏の宗室」(『中国史学』９　１９９９年、のち『魏晋南北朝官僚制研究』汲古書院　２００３年所収)
②同上「従籍貫、居住地、葬地所見的北魏宗室」(『国際中国学研究』５　２００２年、のち『魏晋南北朝官僚制研究』 汲古書院　２００３年所収)
窪添慶文氏①研究によれば、孝文帝が親政開始後、太祖を平文帝から道武帝に変更し、さらに直属に数えられる太武帝・景穆帝（元晃)・文成帝・献文帝の子孫を４廟として、特別扱いした。
同氏②研究では、宣武帝代に太武帝の子孫に代わって孝文帝の子孫が４廟に加えられ、新しい４廟を中核とする体制が洛陽邙山の墓域に反映したとする。

(33)　注（26）①②③④⑤⑥拙稿参照

(34)　谷川道雄「両魏斉周時代の覇府と王都」(唐代史研究会編『中国都市の歴史的研究』〔文部省科学研究費綜合研究(A)報告書〕 汲古書院　１９８８年､のち『増補隋唐帝国形成史論』筑摩書房　１９９８年所収)

(35)　附図「ユーラシア東部農業－遊牧境界地帯図」は、妹尾達彦氏作成の以下の図を簡略化したものである。『国際シンポジウム　都市と環境の歴史学：５年間の成果』〔日本学術振興会科研基盤研究〈S〉〕(中央大学文学部東洋史研究室　２０１９年）所載「図１　本シンポジウムで主な分析対象となる都市と地域」

(36)　小論脱稿後、窪添慶文氏の『北魏史－洛陽遷都の前と後』(東方書店　２０２０年）が上梓された。脱稿後であるが故に、同氏の成果を十分取り込むことが困難であった点を告白するとともに、遺憾である旨を付記しておきたい。

北魏太武帝代（４２４～４５２）対柔然関係表

年代	北魏	柔然	結果	典拠
４２４年	１２月柔然討伐	８月柔然軍６万騎、北魏盛楽に侵入		『魏書』４上 世祖紀上 始光元年８月の條、『北史』２ 魏本紀２始光２年８月の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２０ 宋紀２文帝元嘉元年８月の條；『魏書』４上 世祖紀上 始光元年１２月の條、『北史』２ 魏本紀２ 始光元年１２月の條、『資治通鑑』１２０ 宋紀２ 文帝元嘉元年１２月の條
４２５年	１０月北魏親征軍、五道より進軍		柔然主牟汗紇升蓋可汗（郁久閭大檀）部落遁走	『魏書』４上 世祖紀上 始光２年１０月癸卯の條、『北史』２ 魏本紀２ 始光２年８月の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２０ 宋紀２ 文帝元嘉２年１０月の條
４２８年		８月柔然１万騎有余、北魏に侵入	北魏附国高車追撃撃破	『魏書』４上 世祖紀上 神𪊲元年８月の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２０ 宋紀３ 文帝元嘉３年８月の條
４２９年	４月北魏親征軍出動	４月柔然損害甚大	４月 柔然主牟汗紇升蓋可汗（郁久閭大檀）西奔 柔然３０万落降伏 ７月 柔然主牟汗紇升蓋可汗（郁久閭大檀）憤死	『魏書』４上 世祖紀上 神𪊲２年４月庚寅の條、『北史』２ 魏本紀２ 神𪊲２年４月庚寅の條、『魏書』４上 世祖紀上 神𪊲２年５月丁未の條、『北史』２ 魏本紀２ 神𪊲２年５月丁未の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２０ 宋紀３ 文帝元嘉６年４月庚寅の條、『資治通鑑』１２０ 宋紀３ 文帝元嘉６年６月の條
４３１年		閏６月柔然、北魏に朝貢		『魏書』４上 世祖紀上 神𪊲４年閏６月乙未の條、『北史』２ 魏本紀２ 神𪊲４年閏６月乙未の條

年代	北魏	柔然	結果	典拠
４３４年		２月柔然主勅連可汗（郁久閭呉提）、北魏西海公主を娶る。太武帝、柔然主勅連可汗（郁久閭呉提）の妹を左昭儀とする。柔然、北魏に馬二千匹を朝貢。		『魏書』４上 世祖紀上 延和3年２月丁卯の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２０ 宋紀３ 文帝元嘉６年４月庚寅の條、『資治通鑑』１２０ 宋紀３ 文帝元嘉１１年2月の條、
４３５年		２月柔然、北魏に朝貢		『魏書』４上 世祖紀上 太延元年２月庚子の條、『北史』２ 魏本紀２ 太延元年2月庚子の條
４３６年		柔然、北魏に侵入		『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２３ 宋紀５ 文帝元嘉１３年の條
４３８年	7月北魏親征軍、三道より柔然討伐に向かう		北魏軍、柔然と遭遇せず、帰還。漠北大旱により、人馬多数死亡。	『魏書』４上 世祖紀上 太延４年7月壬午の條、『北史』２ 魏本紀２ 太延４年7月壬申の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２３ 宋紀５ 文帝元嘉１４年の條
４３９年	６月北魏親征軍、北涼討伐に進発	９月柔然、北魏の北涼遠征に乗じて京畿地方に侵入		『魏書』４上 世祖紀上 太延５年5月戊子の條、『北史』２ 魏本紀２ 太延５年9月戊子の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２３ 宋紀５ 文帝元嘉１４年の條
４４３年	９月北魏親征軍、４道より柔然討伐に進軍			『魏書』4下 世祖紀下 太平真君４年9月辛丑･甲辰の條、『北史』２ 魏本紀２ 太平真君4年9月辛丑・甲辰の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２４ 宋紀6 文帝元嘉２０年9月辛巳の條
４４４年	９月北魏親征軍、柔然攻撃を企画		柔然主勅連可汗（郁久閭呉提）遁走。北魏、軍事行動を中止。	『魏書』４下 世祖紀下 太平真君５年9月丁未の條、『北史』２ 魏本紀２ 太平真君5年9月丁未の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２４ 宋紀６ 文帝元嘉２１年9月丁未の條

年代	北魏	柔然	結果	典拠
４４８年	１2月北魏軍、柔然討伐に進発		北魏軍受降城に至るも柔然と遭遇せず、帰還	『魏書』4下 世祖紀下 太平真君９年１2月の條、『北史』２ 魏本紀２ 太平真君5年9月丁未の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２５ 宋紀7 文帝元嘉２５年１2月の條
４４9年	正月北魏親征軍、柔然討伐 ９月北魏親征軍、３道より柔然再討伐		２月柔然一千家余り投降。柔然主処羅可汗（郁久閭吐賀真）遁走。 ９月北魏、柔然の民戸・畜産１００万余りを獲得	『魏書』4下 世祖紀下 太平真君１０年2月の條、『北史』２ 魏本紀２ 太平真君１０年正月甲戌の條､『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２５ 宋紀7 文帝元嘉2６年正月の條；『魏書』4下 世祖紀下 太平真君１０年9月の條、『北史』2 魏本紀2 太平真君10年9月の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』1２５ 宋紀7 文帝元嘉２６年9月の條
４５０年	９月北魏軍、皇太子拓跋（元）晃指揮下で柔然討伐（同月先に太武帝親征軍、南伐に出発；拓跋〔元〕余、平城を留守）			『魏書』4下 世祖紀下 太平真君１1年9月癸巳の條、『北史』2 魏本紀2 太平真君１1年9月癸巳の條、『資治通鑑』１２５ 宋紀7 文帝元嘉２7年9月辛卯の條

注（6）②潘國鍵氏書２１６～２６３頁附録（１）北魏与蠕蠕関係簡表及び帝紀資料録・附録（二）蠕蠕興衰簡表をもとに作成

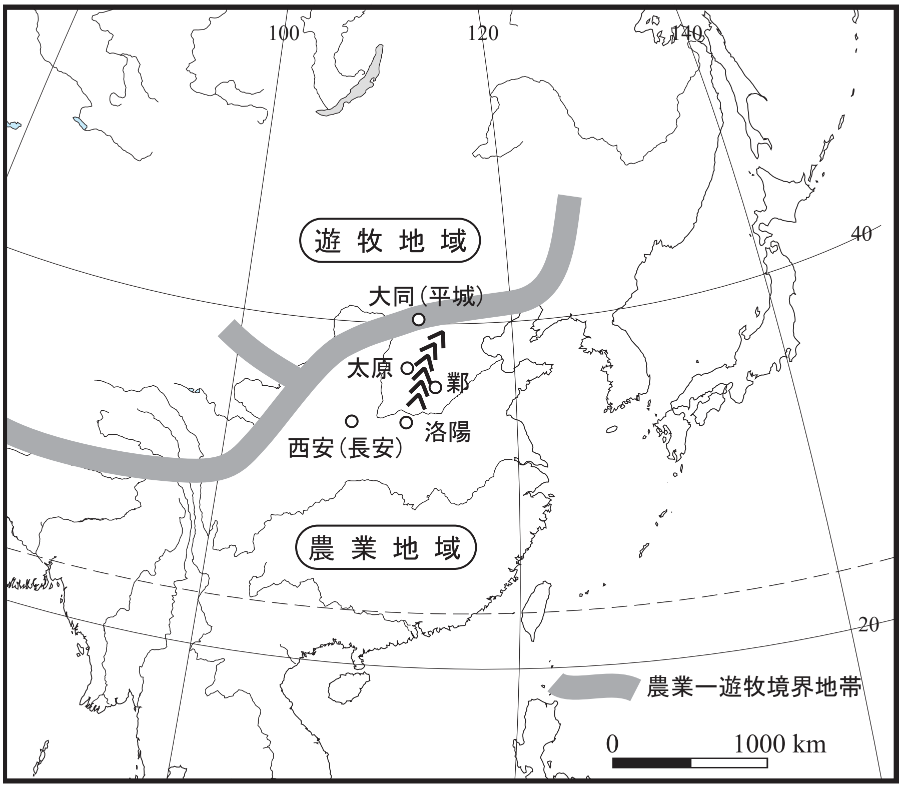
北魏文成帝・献文帝・孝文帝代（４５４～４９２）対柔然関係表

年代	北魏	柔然	結果	典拠
４５４年	１１月北魏鎮将、柔然を攻撃		馬一千匹有余獲得	『魏書』５ 高宗紀 興光元年１１月の條
４５８年	１１月北魏文成帝親征軍、柔然を攻撃		柔然主処羅可汗（郁久閭吐賀真）遁走；柔然別部数千落投降	『魏書』５ 高宗紀 太安4年11月の條、『北史』２ 魏本紀２ 太安４年１１月の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１２８ 宋紀10 孝武帝大明2年11月の條
４６４年	７月北魏北鎮遊軍、柔然を大破	7月柔然主受羅部真可汗（郁久閭予成）、北魏に侵入		『魏書』５ 高宗紀 和平5年7月辛丑の條、『魏書』１０３ 蠕蠕伝、『北史』９８ 蠕蠕伝、『資治通鑑』１２９ 宋紀１１ 孝武帝大明8年7月の條
４７０年	９月北魏献文帝親征軍、2道より進み、柔然を大破	8月柔然主受羅部真可汗（郁久閭予成）、北魏に侵入	北魏、柔然の斬首５万級、投降者１万有余	『魏書』６ 高宗紀 皇興4年8月辛丑の條、『北史』２ 魏本紀2 皇興４年８月の條、『魏書』６ 高宗紀 皇興4年9月丙寅の條、『北史』２ 魏本紀2 皇興４年9月丙寅の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１３２ 宋紀１４ 明帝泰始6年の條
４７２年	２月北魏軍、柔然軍を迎撃 １１月北魏献文太上皇帝親征軍、柔然討伐に出動	２月柔然、北魏に侵入 閏6月柔然、北魏敦煌を攻撃 １０月柔然、北魏五原に進撃	２月柔然遁走。柔然1000 落有余投降 ７月北魏敦煌鎮将、柔然軍を撃退 １１月柔然遁走	『魏書』7上 高祖紀上 延興2年2月の條、『北史』３ 魏本紀3 延興2年2月の條、『資治通鑑』１３３ 宋紀１５ 明帝泰豫元年2月の條 ;『魏書』7上 高祖紀上 延興２年閏６月壬子の條、『資治通鑑』１３３ 宋紀１５ 明帝泰豫元年7月の條 ;『魏書』7上　高祖紀上 延興2年10月の條、『北史』３ 魏本紀3延興2年10月・１１月の條、『資治通鑑』１３３ 宋紀１５ 明帝泰豫元年10月・１１月の條
４７３年		7月柔然、北魏敦煌を攻撃 １２月柔然、北魏に侵入	７月北魏敦煌鎮将、柔然軍を撃退 １２月北魏柔玄鎮勅勒、柔然に呼応	『魏書』7上 高祖紀上 延興３年7月の條 ;『魏書』7上 高祖紀上 延興3年１２月壬子の條、『資治通鑑』１３３ 宋紀１５ 蒼梧王元徽元年１２月壬子の條

年代	北魏	柔然	結果	典拠
４７４年	７月北魏敦煌鎮将、柔然軍を撃退	５月柔然、北魏に朝貢 ７月柔然、北魏敦煌を攻撃		『魏書』7上 高祖紀上 延興４年５月甲戌の條、『資治通鑑』１３３ 宋紀１５ 蒼梧王元徽２年５月の條 ;『魏書』7上 高祖紀上 延興４年７月癸巳の條、『資治通鑑』１３３ 宋紀１５ 蒼梧王元徽2年7月癸巳の條
４７５年		１０月柔然主受羅部真可汗（郁久閭予成）、朝貢。通婚を請求。		『魏書』7上 高祖紀上 延興５年１０月の條、『北史』３ 魏本紀３ 延興５年の條、『魏書』１０３ 蠕蠕伝、『北史』９８ 蠕蠕伝
４７６年		２月柔然、朝貢 ５月柔然、朝貢 ８月柔然、朝貢 １１月 柔然、朝貢		『魏書』7上 高祖紀上 承明元年２月の條 ;『魏書』7上 高祖紀上 承明元年５月の條 ;『魏書』7上 高祖紀上 承明元年８月の條 ;『魏書』7上 高祖紀上 承明元年１１月の條 ;『北史』３ 魏本紀３承明元年の條
４７７年		４月柔然、朝貢 ５月柔然、朝貢		『魏書』7上 高祖紀上 太和元年４月丙寅の條、『魏書』１０３ 蠕蠕伝、『北史』９８ 蠕蠕伝 ;『魏書』7上 高祖紀上 太和元年５月の條
４７８年		２月柔然主受羅部真可汗（郁久閭予成）通婚を請求、朝貢		『魏書』7上 高祖紀上 太和２年２月戊戌の條、『魏書』１０３ 蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝
４７９年		４月柔然、朝貢		『魏書』7上 高祖紀上 太和３年４月辛卯の條
４８０年		３月柔然、朝貢		『魏書』7上 高祖紀上 太和４年３月乙卯の條
４８１年		７月柔然別帥他稽内附 １０月柔然、朝貢		『魏書』7上 高祖紀上 太和５年７月辛酉の條、『資治通鑑』１３５ 斉紀1 高帝建元3年7月辛酉の條 ;『魏書』7上 高祖紀上 太和5年10月癸卯の條、『北史』3 魏本紀3 太和5年の條
４８２年		６月柔然、朝貢		『魏書』7上 高祖紀上 太和６年６月の條
４８４年		２月柔然、朝貢		『魏書』7上 高祖紀上 太和８年２月の條、『北史』３ 魏本紀３ 太和８年の條

年代	北魏	柔然	結果	典拠
４８５年		１２月柔然、北魏侵入		『魏書』7上 高祖紀上 太和９年１２月の條、『資治通鑑』１３６ 斉紀２ 武帝永明3年1２月の條
４８６年		正月柔然、北魏侵入 3月柔然、朝貢 １２月柔然、北魏侵入		『魏書』７下 高祖紀下 太和１０年正月壬午の條、『資治通鑑』１３６ 斉紀２ 武帝永明４年正月壬午の條;『魏書』７下 高祖紀下 太和１０年3月丙申の條、『北史』３ 魏本紀３ 太和１０年の條、『資治通鑑』１３６ 斉紀２ 武帝永明3年3月丙申の條;『魏書』７下 高祖紀下 太和１０年１２月壬申の條、『資治通鑑』１３６ 斉紀2 武帝永明3年１２月の條
４８７年	８月北魏軍、柔然軍を撃破	8月柔然、北魏侵入		『魏書』７下 高祖紀下 太和１１年8月壬申の條、『北史』３ 魏本紀３ 太和１１年８月壬申の條、『資治通鑑』１３６ 斉紀２ 武帝永明5年8月の條
４９２年	8月北魏軍、３道より柔然を討伐		８月北魏軍、柔然軍を大破	『魏書』７下 高祖紀下 太和16年8月乙未の條、『北史』３ 魏本紀３ 太和１６年８月乙未の條、『魏書』１０３蠕蠕伝、『北史』９８蠕蠕伝、『資治通鑑』１37 斉紀3 武帝永明10年８月乙未の條

注（６）②潘國鍵氏書２１６～２６３頁附録（１）北魏与蠕蠕関係簡表及び帝紀資料録･附録（二）蠕蠕興衰簡表をもとに作成



ユーラシア東部農業ー遊牧境界地帯図